農家必讀

初篇

下

本編

特1
5

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5

ガラス使用

内閣文庫

農暇必讀卷之三

江戸　山崎美成　編輯
町田正房　增補

穫收

種ゑを稼といひ歛ゑを穡と云種歛ハ年中ゝ始め終のゆゑ力め耕し秋ハ穫收もゝとハ云ばらくそ油断なく偏ゝ盜賊をふせぐもゝ如く風雨のゝとめふそこなはれ零落せん事と片時も忘るべからず○又云稼ゝ農事の本穡農ゝの末なり本ゝ末ゝ相ゝ緩急なるゝそ

その理なゝさとりされバ秋の收めも多からんことをねゝ

国立国会図書館　タイトル『農暇必讀 3巻』　請求記号 特1-5
ガラス使用

特1
5

すぐ則春の耕しを怠らず怠るべからず苗のつとめふ出精
すれば秋の実のりふ利あらんとそれらず嚢中の物をとるが如く
なり○扨又秋のうり収めハ物ごとく實のりて日和をよく見
定め寔ふ火を救ふがごとく精力を尽し務めるさきをば
も油断なく刈収むべし一時の風雨ふりて年中の苦労
と空しくすることもあれば夜と日ふつぎて刈りとるべし耕作
のならひふて刈とるにあたりて場ふ入ざれハ安堵ならぬものなり
そも歳の豊凶の極めも必獲取りこと日あらでハさざまら
ざるゆゑ災もなく刈収るハ誠ふ大きなる幸この上もなのき
ことなれをバいそひよろこびて土神ふを向け祭るべし則天

地の恵物と生立る事も人の稟る氣もそと二つなき理り
なれバ人憂ふをバ天もうれへ人悦べハ天そよろこぶなり古
れバ天地の人と育ふるめふ儲けこと穀物と事ゆゑもふ
く刈りとるめふあり難さ仕合なりと丹誠を尽して
いそひよろこび楽むべしそれ人事の誠ふより天地の感應
あるとハ形ちふ影のごとく響のひびきに應ずるごとく
遠ざかることなれバ正直と専ふ怠りなく力むればその行く
ふ隨ひ福ひと得ること疑ふ所なあらず然ども凡人のな
らそしはあきまきハ欲まあくとるくその限のもきく
まくなく安りふむ心のを深くして天のあさへと不足と

でうりまつりそこれ誠に天道あさうに理りふく笑と招くの
をふりされハ人こ貧富とバをあらせその職分をとくつとめ
て天分をまもるべしこれら農人ハ春の耕し夏は耘りふ
力を尽し時をりぬる秋のをさめとつくしんて刈取るべし
又うるもの陽氣を以てうる刈物を陰氣ふくりて收るを
理りてうる前く事ハ一日も早く時ふ先立とうとこ陽氣
ハすむ四月をり刈收るハ少し出そくなく熟くして一日二日
もおそきとうとす陰氣ハおくゆるされども麦と
刈るふハとじめハまづ少し麦穂をもぢてうるわるふく
てハ終りふ梅雨のおそれありあとの耕しも又時ふふく

まて陰く夏秋の転りまておくるとなれバ片時も油断すべ
からず蓑笠をきても刈り取るべし〇又蕎麦ハ十分ふ實
のりと待く上までのこらず黒きを取あバ一夜の霜又暴風
まあひてをを空しくするものなりこれ外豆ハ場ふ熟す
とて莢さやの糸よ少く弛まる内ふちやくぬきて場ふて
干うちとるなり〇又粟と黍とハおれど穂の垂るときび
ハさやくうるべしおそれバ實ふこぼるるなり粟ハおそく刈る
べしとやくなれバ粃多し〇又刈收るふハ天氣の陰晴をよく
考へとるべし刈おきて雨まあくバ損とみることあるべし〇
又刈るものを取りふけ種のうすくきをとえらび用ゆ

べし鈍そうなふくうれば穀をもおちやすくたその身も若労してそのめざるあるうゑの費をいとをしむ利を用ひべし○前漢書ふ記しおそそ穀ハ一色と多くハ作るべからずといへとなれば五穀とそどめいろく雑穀穀多く作れハさとひ凶年ありてもその中ふうるぶ利をはるものをあるあるとなるまでうる損ずるまでの愁ふるを若一種と多く作りて相應する年ハ大利と潤ることもあれどそれハ稀ふしく災害ふあるべしハ多べし農人ハ一ならずいろくと作るべしとうんえうり殊ふ土地のお應不相應をあり品くのねを求め作るべし　農業全書

糞養の説

田畠ふ浪薄あり土ふ肥磽あり薄くやせる地ふ糞を用ゐる農事の急務なり薄田と爲して良田とする癖地と肥地とるもとハられ糞はもちゐやーるひふあらばまバあるとそいふ〳〵人少く田地あるゆ多年くに地を替へ或ハ二三年も地をやすめおきて作りしをけ糞養者おろそかくもよく實のうて公私のやーるひ民こうらぶず近世ハ人多く且飲食の費ふぎやるきゆ多歳ふ替息おくこそいふ及ぶず種蒔ふ年中ぶんくうちぶき間もなくもぐれハ地の力衰へうりて發生の氣ふき

ゆゑ糞土をよく用ひ地力を助けて常ふさんふせずそいうんぞ秋の収め男こやうるんやうふりて糞壌とあつめくくるるくくくくを専ふすべし　たとえ農家秋場を収め藁芥糠ちしう枯草ふふるるまでありくあるこやしとなるべきあをてくくふ集めおき毎日牛馬ふたらせ踐ひさせくくど高くうりくくる時傍なる糞屋ふ移し　ふくべし　沸ふふふ限ふちくひて糞屋あるべ　糞屋ふしてハくくを多く貯くべし　○さて風雨のつせぎとくくし糞とどんく堆くうちくきね牛馬の敷多きものハふ山のごくふ積くわくべし　毒ふまりてハ一疋の牛馬のくくくる糞大くる田地五段ばうりハくく肥すべし　これまづ農家毎年

必しもつとめて貯へれくべき物なり○又田畠を肥すふ苗糞草糞灰糞泥糞の四色あり先苗糞とりふ菜豆を上と一ふ豆胡麻をそれ次とす大豆吾豆もう一番年五六月田ふ厚く蒔きくくくど中くくを七八月梨くやし敷おきて毒穀田とする時ハ二年の取りともあるものふて沸糞を去くくふくくくふ勝れり　これハ齊地多くして間ふハその田を息むくくくく

乾し貯へたきて畠物をうゆる時のあごえふして植りまけ
よろし尤種子ふ合せて蒔そよしこれねだき土堅き土ふ
用ひて一入よろしく初めをつよくさく拵たり○又火糞と
いふ芋の初をつくりさねてむしやきよしその灰をとるこ
えふ合せ麦を蒔その外よろづのあふ用ひて農氣もせずをし
こしらへるべき所あらば多くもつて貯へ置きて源田源畑ふ
へんば取りもみよろしふ麦を蒔肌糞よしてさびたし
をろくの菜とうめふ兎このやさごえを用ゆべし取分け
温室ふはよろしてふ此火糞ハ拵の出来とそのむる
ものなり○又場の一方のあき便りよきところふ煉屏を

築き糞屋を作り湯釜をわりすゑ毎日掃除の塵あくこと
その外あらゆる物をとりあつめ又その外の仕事ふ出る者ハ常
ふ草ぐら何とても目の及ぶうぶり取り持来りてうらにおき
この釜ふ下ふ火の絶間なく焼ぬれば熱湯のこゆることもなく
万ず用を達しその灰焦土つもりて限りなき糞となるべし
沐浴の湯洗濯の濁りあをバこるる糞溺ふ合せて水ごえと
なすべし○麻ごて作り物ふ糞しを用ひても時分くのう
るやひをなさぬれハ元陽とそこで陽氣のこもりて土地乾き
るぞふとりさるべき時せつそづれてうねそれを入まても空
しくうるものなりうれハあごえを多く貯へおき時とと

うゆてこれを用ひ陰氣のやゝるひとすべし水糞燒糞の
二色ハ才一陰陽を調ふるさゆふ専用ゆると心得べし物のふ
とり栄るとハ陰陽ふうるおひの養ふあり又その実の陽
氣の力なりと知るべし○又泥糞とゆふハ池河溝などの底
の肥そる泥をあげよく乾しなどき糞屋ふ入れおき
久しくなどくて人糞灰などと合せ又ハ新しく熱氣のつよき
こゝろと合せ用れいその外こゝろしつよしのこゝと用ゆべ菜ハ
類その外作り物ゆくゆせのつくとれく吹込の所ふ用ゆべし
物の芽しるあを解しあをとやゆふしゆふ用ひく
雜なきこゝろ○又草糞とゆふハ山野のうき柴や

草をなどゆとひゆふうきとゆうきを取りて牛馬ま
ゆるせあを或ハ積こゆりて腐らし又そのまゝ田畠
ふ多く入るれバ取りもけよくきく物なりこゝふそれ田畠ハ
土やとらざとらきて浸まで肥るものなり陽氣発生の
さうんなる時のあるれバそれ柴草の陽氣を以て則五穀つ
くり物の陽氣を助けてよくはるゆる理りなり○又この外
腐ア爛ゆるあを又そゝぐらそしきあの類濁ゆる沐浴の
垢付ふるゆるまて糞桶ゆるめあを湯腐ゆる付用ゆべし
ゆる糞を入るふハ桶を用ゆべし瓶の類ゆ陰氣ありて入ふ
く糞ゆきつぶれずしてきく事ふとれり○又ゆ糞の類

を菜ふるるふへ弱き物ふハ細面の中ふそぐ下常ふそ
雨中ふ糞をこれハ糞の余まるぐれて益るゝ晴天ハ
日をよしとす○又糞を穀田ふ用ゆるハ土ふまき碎
るに晴るる時うちひして干つれば去りる時そ
濃糞をうけるふそ甚勝れり○又魚肉獣の類くさり
つぶれるを糞ふしてよくきくものなり氣ぬるあ
るひハ寒き時すやふくさらうさんとるらばそれ桶ふ
韮を一握りもみてへるれば明るる自くたるそのれり○およ
そ外ふく糞桶をく雨のそらざるやうふくおわひとし
て置くべし南向のところ桶の内まで日はさしいるとよし

とす○又湿氣冷ある泉ふ近き底冷氣する田ハ山田
の日をあんぜる所るどハそのもとあるべきとるらバ蠟蛤
ハ類の貝がらを灰ふやき糞ふ合せ用ゆれバ去るし甚つよし
○又山田の冷ある痛むところふハそれ所のうらふより日ハ当
る山の腰ふ井ふの溝を遠くより堀りとゝ〻そおこづ
るべく日ふあたり暖りてその田ふ入れバ冷痛こセぬそのの
うりそれ溝のうるれ草木をそうりのけて溝の日あたを
つくすべくよく日ふあたり温まる水ハ糞ともふるもれ
なり○又ある家の内ふ汲み入まて百日もおきぬまてそ
糞とるるものなり○又土も屋の内まはらび入れべく百日

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』　請求記号 特1-5
ガラス使用

も雨露ふあたらぬ所に糞となるものなり○又上糞といふハ
胡麻荏菁の油糟木綿ざねの油粕又ハ干鰯鯨の煎糟同
骨の油うす人糞等のいろく力ハ及ひ貯へあるひハ形よ
或ハ水糞と入まぜあはせてくたくたとしをそれくの土地と作物
ふりて用ゆべし黒土赤土の類ハ油糟をまぶすべし沙
地ハ鰯よし濕氣埴土ハ心をつけふ木綿ざねの油糟よし上
糞の分ハ田畠ふくぎらず何ものの拘ふ用てもよくきく物
なりされとも土の性によりて少づつの用捨ハあるべし簡
指引して用ゆべし○そもく黒土ならばきて肥えさ
るハ信ふ美土なりなれども間ふ餘り肥えすぎてこのり

少ふきこなりこまふハ河の沙などをへきてさハやふふすべし
焼土ハ信ふよろしく然れども糞を用ひてまへをよくし培ふ
時ハ苗さうへく實ならず土性ふ美悪ろくろりあると
いへどもそれ術を盡しそれ土地ふよく合へるこゝを用ゆれば
必ずよろしきふいふこれを田家ふ糞藥といふ実に
それこゝを用ゆるの法医術よりもく仰ぎ土地ふ虚実冷熱あり
糞ふ補瀉温涼あり土性ふよくやせさふハ鰯油糟人糞などの
土地を補ふ物を用ゆべし又地の実してつく肥るとうく
實のりあるきふハ河溝などの沙泥をよく干おきて碎きて
入るべし又白沙を入てを土氣のつよるもしる滯りとなるべし

○又湿氣底冷毒のあるゝハ灰や焼糞の類を入まして温む
べし○又南向終日日あたの所そゝうるゝひゝく土乾
きて陽氣うちそゝるところゝハ糞を用ひて陰氣を助く
べし○又糞壌を貯へおく事も業稙を納め置ごとし
風雨湿毒ゝあゝらず日向のところゝ糞屋を作り軒を
ひきくして内を堀り瓦を敷きあるひハ石をとゝ灰糞乃
類を入れその一方ゝハ桶をいけゝ糞を溜めおきおのく
用ゝ任せてつゝゝべし喻へバ良醫のゝろづの物を捨ずあ
つめくゝおきてそゝくの功能ゝ施ひてこれを用ゝ痛
と活するがゝしすべて農民の糞灰を大切ゝふるゝと精果

とれゝふしく思ひ入て耕作をつとむべしくのゝくして富を
得ずといゝふこれし財穀の多少則この糞と畜ゝる手立ゝ
あるとと知るべし○又古語ゝも上農ゝ糞を惜むゝと英金子
浅惜むごとしこもいゝり○又油糟鰯などの糞と貯へ
置きていろくゝ雑糞ゝ合せ和して用ゆれいその効ゝ多
き物なり尤上糞ゝなりを用ゆれバその効ゝしくゝ利を
得ること速なりといゝとも所ゝより作るものゝよりてハ都
遠き所ゝて雑菜雑穀などそれ價ひ直なるその又ハ田
畠それ作人の分量ゝより多くて手ゝ入ハかりてあらこゝな
しきゝるゝ大切なるゝ糞の高直なるを用ひてゝうて

入用まけして利潤をゆゑいろ〳〵才覚をもて雜糞を多く蓄へおき上糞と少づゝ合せて用ゆべし　これ則医者の人参甘草などの良薬を少し加へて他の薬性を引立ると替らざるなり　○又糞も薬劑と同じ心得て一色ごとゆきうぬものゝ色を取り合せよく熟して用ゆることなれば肝要なり糞ふるぎりて新らしきはよくさらねさせ干らし熟して加減をよく覚えて熟する時用ゆるはその益多し　但あまりに久しく熟するは陽氣のぬけさるなり　○少なしとなるべし　○又田島ふ糞を入るゝ喩へば和をあつるが如しそれくの

あしくなるを思ひあはされば味ひ調ぶるものゝ有りやしもそのごとく土と糞とよく交アむらなく思ひ合されば其少くあるひハ虫氣などの病を生ずるおそれもこれしのぐんあしくむらまじりなハ地ごしらへのあしきより出来ること多し　然るゆゑふ土地ハ深きなどゝ利潤ハ多々なれども糞のみきとゝろふかく底のふが土をふく起し耕すハ和物のそれ抱ハ多くしてあしゝの少きと同じ心なりけれふの理りをよくさまゝ糞のさしひく彼良医の薬を用るごとく機轉をよく合点して農業をつとめるんハ目前ふ利潤を得んと粉ひるべし　前ふ云ふごく

醫者の薬種を吟味し大切にしてとさめおきそれくの用と待てつくゞく農民ハ慈心を用ひて糞しをはゞ多くあつめおき種物ゟより土地ゟより時ゟを考へよろきふ陸ひろく用ひるバ作物の元より實ゟおいてハ偏ゟ我倉の内ゟ物をこゝろゞくゟ少もらゞひあゞのらずこれ誠ゟ土民餓賤のゟゞの中ゟも元り分けいやしきゝなれバこの理りを要くゝ志らぬ方ゟ及てハ極めていやしめろ〻ひゞくまでゝ五穀の実のりなき磽悪の土地を忽ち変して肥良の地と成し少くゝ急て多く収め取ること目前ゟり然ゝバ天地化育の功を手ゝゟ助け百穀を世ゟ充しめ万民の生養を厚くすゝるゟ農業の内ゟてゝ取り分け此糞壌を調ゝるを以て肝要とゝすべされバ心あらん農夫ハこの理りを深く思ひろに心を留め眼をつけて慎ゝてゝくゝそれ事をつとめざらんやこれ則目前ゟ天地の化を助けて世をゆゝゟゟゟの手ゞてゝなれバ聖人の志ゟゝゟるひゝゟるゟゞなり心あらん人誰ゝこゝを志ゝゟゝざらん　農業全書

肥培

夫肥培ハ山海ゟてその品多きゝとなゝをバとゞくゝ八云ゝく運送遠ゝの勝手土地相應の肥培を求ゝゝ農家の

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』　請求記号 特1-5
ガラス使用

宜法なりとくてそれくふ肥培を用ひべく心を盡すと
ゝとを理なくらを時を無益ふ費ひるとゝろ多し
ゝてその用法ハ大畧を論すべし
今次ふ所ふる肥ともハ大ゝ何者ふ少ても無益ふ捨るも
のともなりとく功能を考へてゆめく疎ふすべからず
先塩氣ハ肥培の要と知るべし　その性陰にして鎮むるを以
て徳とす物ふ合て加勢とするものなり
漬物をゝして数日を保ゝを食物何ぞ珍味美者なり
とも塩加減なるを時ハその味ひの著ゝとゝふ少し
されハ田畑の肥培の類ふくもその品ふより相應の塩氣を

き時ハその功出難し　美物ハ功を出さゝむる八則肥培乃
基なるもはなはだ此意味を常くふ辨へざれハ自然費やし
易し　如ての腐ものゝ類を無益ふ捨べからずその種ゝと辨
へて肥培ふ用ひべし　さて物ふよりてハ性重くして芝葉に著けば宮
ふるものあり葉ふ害をなすハ却て根の方ふ良薬なり天
地の事表裏金きことあるこゝ譬へハ人の両眼の面ふありて
背ふるなり如し　塩漬その腐りなるを芝葉ふ付ける
害となるとそなるとあるひハ汚るゝとふ捨るを世ふ多し宮ふ
効能なるをふあらずや　○或人云干鰯の塩氣つきハその
能少し此理いかん答ふ海魚ハ潮ふ育ちて抱れども持ざる

塩竈ハ焚きものゝ多り晴天にて早く乾し〜てそれ能し
雨天の時ハ魚腐るゆゑ塩にて保ちそゝりこれを乾し〜てはゞ
塩つゞしてその能ろし〜自然塩ある土ふ塩を加ふる故過
てその功少きなり○灰ハ民家の竈ふく日くふ出来るも
のゆゑそれ功甚多し〜その利ふるゝを辨へざれば費
故ふその大略をこゝふ記す

灰を蓄ふる場所ハ北より床を高く上け土湿の氣の移
らざるやうふそれ場を造るべし地湿うれば能と失ふ
夫灰ハ薪もえ陽氣空ふ発し火の糟なり陽發すれ
陰氣ふゝくるゝと自然の理なり火ハ火ふ對し水ハ火ふ

對し陽ハ陰ふ對せるものゆゑ灰ハ火の糟ゆゑ湿を
吸ふこれ灰の能なり故ふ畑もの〜肥培とすべし田ふ用ゆるハ
高田にて多湿少なく乾きそゝなる土地ふ用ゆべし〜その
けハ水氣を吸ひ上る故稲よく実のるなり水湿の田ふ
そゝろし〜底の湿氣を吸ふ故ふ害となるなりさまハよく
土地ふ心を盡して相應の肥培を用ゆれハその功多し〜これ
を農家の農薬とゝりその法医術ふ似る故なり土地ふ
肥瘠あり耕し〜ふ浅深あり肥培ふ補瀉温涼あるゝなれバ
鍛錬をこらし〜その功能を過つゝとなれ○土地ふ強土
ふて閑なりて稲ふ実えざるさふハ稲麦などの糠と肥培ふ

用ゆるハ究めてより別て麦ぬかハよく土を和らぐるものなり
如何とかれバ陰湿の泥を病人ハ医師ならず麦飯をすく
むこと肉を和らぐる故なり穀ハ陰なり糠ハ穀の皮なれバ表
なり表ハ則陽なるハ物ハ対すれバ和らぐる理なり強土ハ
必穀糠を用ゆべしその功少らず○すべて苗もの床のうゑ
ごえハ月代の刈草ハ多くハ干鰯ハきてはとらべども
苗の産立ハ根少なきその故こえるとて疲るるなり然るハ刈草
ハ蕪菁ふきくそのなり聊も害ハ多ふるとたとへいうんとるまバ
髪鬢ハ多く情の陽あるを四時昼夜ともに一刻半時の急なるく
延るものなり故ハ勢力をつくし速ハ茅ゼをむるの良肥培

こときふるをもて麿へぞ犀角一角獣鹿茸などの功能の如し髪鬢
まつと獣の角爪ハ伸るハ多くハ勢力ハ働きハ多くハ
きそのなれハ多く入まてもるを糞の患ひなく平等ハきくもの
なるをはまだこれハ毛髪をハ必種るの肥ごえハ用ゆべし功あり
て聊害とるハ猶この毛髪ハ総ての肥培ハ用い
てそれ結比ひそ
そもくこの髪鬚の肥培ハ用ひて無類の功能あるを已ら
始めて考へるとなり京大坂ならでハ無益ハ捨るの
とゝゆれどハ人ハ繁花の地にてハ流らハ捨るなり故を
されバよく必をつけて髪結床のなり毛ぬけ髪とあつあさ

うんよハるとゝの利とゝなるべきゝなり誰そありて此事をす
さらバ穀作豊饒の基なるべし
春ハ木ふ屋すれバ草木ともふ肥培芯へ上るの理なり夏ハ
ゆふ屋すれバこゝ恵作へ實のる理なり秋ハ金ふ屋すれバ
根へ含むの理なり冬ハゝふ屋すれバ草木枯りゝれバ土ふ
含まるゝ理なり凡肥培の類ハ物の終ふまて体腐て澤
となりゝる物なれバ進むふあらず退くふあらず五行氣化
の恵こゝふ順ひその業をなしゝむるものゝ陰陽の運動を
よく合点すべし　○春夏ハ陽象なるゝ肥培芯へ上るゝゝ稲麦
の類ふ實の速きがゝ　秋冬ハ陰象なるゝこゝ土中ふ保ち

理なり根の方ふく突入その八重く用ゆるゝなり
穂ふ實入ると根ふ突入るゝハ表裏あり
春夏ハ地中陰氣なり秋冬ハ地中陽氣なり故ふ暑寒ふ
なりて井ゝふ冷温あり右の心得なて肥培を用ゆべし　○世
俗こゝふハ心を尽すゝなり然ども右ふいへる四時の象候ふ
て用ゆる時の遅速作物の品ふよりゝて心を用ひず
殊ふ人の種なと耕しの乾湿なども必つゝず肝要の湿の
渇なとゝなどゝ其理とハ麁略ふして徒ふ價を出しゝく
求る肥培ふの心を痛め苦ハ異なりといへべし　○種藝の
術要しゝとも肥培を用ゆるその種くを辨へざれバ苦て

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

病害は患ひを發することあり故ふことを辨ふべし
こえるる時は大きに害をなすべし凡肥
熟の地に產する物は弱く瘠土に生ずる物は強くそは
山野に生ずる猪鹿熊などの毛色の美しきにて知る
べしまた効能ありて業をなすものあり人家に飼ひ置
くは能く形も見るきものなりこれ食物を人に
受て美食するゆえなり是を以てよく心を盡し
こえのる不足を考へべし
又糞氣に非ず不時に疲れて五穀は勿論睦畔などの草木
もまた病ひつくる適ふ有りとは云ども已れより發さぬ病ひ

うるはは敷すること速なり凡考ふに人家の庭木は土地
自然に肥熟すれば病ひつくること易きものなりけて疲れての害と
いふは枝葉に煤をぬりたるごとく黑くふるは又は白粉をぬり
たるごとくなるは肌おろそかなれるは巴糞とりて疲れて
より發る病なり麻は繁花の市中には病犬あり山野の農
家の犬には病ひなきがごとし鹿食なるは故なりけて敷なも
元来は病ひなきものなり適時候不順なるに北風の後なるに
は虫或は病ひなどひろくつくるありとは云ども散ることまた
早し大概は種子の条下に記すごとく甲乙肥瘠を強まずして
瘠実を蒔つくれは生育弱なれは根つくること早くぬるり疲れ

る糞とそり終ふ痛ひつくそのありこれを以て苗植その生立勢力を計りて肥培を用ひしむひ立弱くハこえをひらくる事肝要なり雨潤ひも程よく速ふ生立ハ厚糞すくし生立早くなるべる糞の疲きるき故畏ふの害あるべふし

○耕作時ふ応じ種藝

る不足を考へ加減を懈ることなかれ

節ふ遠ふずとゆくども肥培の足らざるハ無病の人飢渇より遠へるなり氣ハ餘主でも十分の業をおすことあるべず

其證據をもくぶ秋田の刈株より芽の生ずるふく試むべし

肥培をらずして不出来なる稲株より生ずるうりこん能くとぐき生長りて充分ふ実のるべあるに芽出ることなし

小出来の刈株より芽の生ずるゆ縁ハこえの不足ふて土地の力及ぶぬ故発生ハ弱きふよりて勢力根ふのこりるをバ再び芽を生ずるふり

土地の力を肥培の力とお為すをハ稲の勢力をぐくを穂ふ発出し再び芽を生ずるこのこりまくを畏を考へて肥培をぐ用ゆべし　農業餘話

草木の培養

案ずるふ山野自然ふ生ずるところの草木ハ実熟して自落腐爛すをバ則その物の肥しとなる釣り草木ハ葉藁

て暑寒を厭ひ夏木秋葉落て土を覆ひ冬と凌ぐこれ自然の理なり然るを冬と採り盡しあるひは葉と掃除するを逆の理ふ逆をの形なれ入培の法を用ひざれば生長せざるなり花鏡云人力亦以奪天功とも云ふ誠に然り又云澆灌人之需飲食也不可太饑亦不可太飽ともいへり如木ふ用る肥し二十一品あり後ふ審らす又人糞馬糞るどの穢物を嫌ふこのあり種樹書云花木有不宜糞穢者甚多尤宜問用之非其宜立槁ならん蘭百兩金杜鵑虎茨枇杷杜衡るどふ糞を用事を忌むが如し又神社の庭あるひは神前ふ供する草木にて糞穢の物と用ゐる事あるいくの

如き時ハ代ふ用る肥あり干鰯灰汁油糟酒粕ホを合セ腐らして用ゐる大抵同樣ふ肥るなり左傳云蘋蘩薀藻之菜可薦於鬼神と云ふ水草にてもきくれ又もの類糞汚ず觸さる故清潔にして神ふ供ずしとなり

肥土まこと臘土農圃四書こもりふ拵つる法八年ニ耕作する山畑の土冬至の後人糞をそそぎ寒ふ晒して乾し又糞をそそきて乾す事三度その後雨ふあてぬやうふ貯置き春分社頃日中ふさらし度く切ってその時よく虫蟻の類よく草の根芥の類を拾ひ捨てうこれをもて置けば腐れて北むし虻蚋の類を生じて害をなすまた或もろくの草木菊たど

を植るゝ法交あるべしそうゆゑ

○三和土ハ地錦抄小合肥と名つくる法ハ野土三斗赤土一斗
生土一斗真土一斗右三色よくまぜ小ちやうをふるひ人糞一
斗煉合七五十日ほとねうてつかふなり用る時藁灰又ハ
糠を炒りて切りまぜたるをよし○又云南ハ並木いけ垣煉
屏のくさひ高山なとある陰ハ北陰とて必冷氣ある地より三
尺も三四尺を湿氣のほるものゝこの所ハ合肥多へてよし
魚洗汁なとハ肥すきてゝ性のひ立花つさうねるものなり
合肥ハ後なを後と肥の理なり又云草花ハ植て春中より
二月中旬ゝて肥しを用ゆべし葉出て用ハゝりて傷む若

用度ハ合肥ハ用ゆしゝ肥ハ必きろうまりといふ按するに
生て後ゝ肥を用を品ふるゝし植て後肥不足ふ見ゆるゝら
ハ物ふうてゝ肥を用てよし○花鏡云八月草類宜肥木類
忌肥
○溝池の泥并水種樹書云香草ゝとふて糞を用ひゝるきあふ
ハ溝池乃泥水あるひゝ米泔水をそゝぐてよしといふ又
溝の土を揚さらし乾してゝくふるひ石灰牽牛子の類ふよ
しゝ又黒ゝく土を小合をして櫻草ゝよろし
○厩肥ゝまやゞごえともいふ代の肉入る肥しなり農民多
くゝ稭を用ゆその法ハ糞小灰を中人糞小灰を合セ腐らして

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

種をうゆる時まづ既うて馬踏うする藁を厚くしきその上へ砂をしきその上へ糞汁とそくぎて諸の菜類の種とうゆれば下ばの温氣のいるゆゑ早く生ずるなり又畑へ苗とうゆる時ふうとぬくしてうゆれば物ふりて始終肥ふとなるずみ藁の代りふる糞我用ゆもあり

○人糞ハそろくの草木ゑ肥ふ人糞を第一とす久くさるゆ他の肥しふ勝れり何ゆの肥ふそ少しつまりてよし花鏡云正月七分糞三分水二月六分糞四分水三月對和四月四分糞六分水五月三分糞七分水八月四分糞六分水九月對十月六分糞四分水十月七分糞三分水十一月八分糞而止

地錦抄云人糞一桶ふくゆ二桶入五十日ばかりおきて青きうゆの如くなりうゆる時用ゆると云按ずるふうみ肥ハ雨を催しする前ふうけて雨降ハ別てよく尤ゆ中肥しゆ土へ入るふハゆを少し割ゆるがよし何も人糞ハうく腐りさるゆよし然ると今伝傳ふ寒肥とうひて草木何ふきらゆ用ハ品ゆうゆべしさとハ虫ゆうゆハゆ中ハ熱しく食と求めず暖氣ふうりて食を求む草木もまくくゆうゆくゆゆゆ聽ゆうゆごとし春ふ至りて芽と含む時ゆ寒ゆ時ゆ寒ゆうゆこの時肥しを用ひるば渇するふゆと與ゆうゆ如し大抵芽を生ずる前ふ用ゆべし弱ゆ草木ゆゆふ寒中ゆうゆ肥しを用ゆれハ却りて傷ゆ腐ゆ

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

ものゝ類但し木の類ハよゝしく植うゝく並ふ肥しをそゝぐこと
ゝろし若用ゝく思ゝぐ肥し土をもて植てゝ根づきて後
肥しを用ゆべし
○人屎ハ茲芥の類ふ用ゆゝく腐しゝく用ゆべし種樹書云瑞香
ゝどハ湿を嫌ふ根もゝふ蚯蚓ある時ハ去めるゝり此時ふ便をそ
げバ蚯蚓ゝる死ぬゝゝり
○鰯ゝゝ鰛魚ともゝふ肥ふ用ゆるそゝゝゝと云ごまんゝゝ大
ゝゝごゝめも田つゝもゝる用ひゝ地錦抄ゝ云ゝゝ入て
おゝゝゝらしても用ゆゝゝハそのゝゝゝ花壇綱目ふ肥ふ
いゝむ草ふ用ゆべしゝく炒ゝゝて用ゆと云按ずるふゝ

ゝハ白ふて挽粉ふして用ゆゝしゝゝゝらゝれバ鳥獣ゝる食ふゝり
○洗魚水ハ地錦抄ゝ云ふ苦物ふゝめ四五日置て用ゆゝし魚ハ腸
ハゝゝしゝゝゝして用ゆ花壇綱目云根ふ肥しの入ゝねゝそゝ用ゆ
諸草ゝゝ小根まゝり〳〵ゝゝゝ

魚洗汁あるゝ之ゝ山土を補ひ潤し燒土をあらり性るく虛すぎてつゝ肥をつゝてゝろ〳〵魚の汁を附くゝけ米泔あを節〻そくべーゝ石砂多き地ハ實地より忍土多く切りまぜて魚洗けゝぐゝ肥鰯ごん油糟ホのれもくつゝ肥〳〵いあ〳〵くすぐて肥〳〵るゝなるゝゝらず植物つゝむ地肥ゝるゝ見るゝらバ肥〳〵ハ用ゆるゝなるゝべゝこの見合セ茅一のゝとなり

○灰ハ竈ゝるゝハ大鉢の灰も人糞ふ合せくさらしてねゝ〳〵置き瓜類茄麦栗黍稗おゝ肥〳〵ふ用ゆ花壇綱目云山慈姑青らんゝゝ仙ふゝゝ菜灰を用ゆそれ外ゝぐ〳〵肥ゝるゝぜてゝ少〳〵で

用ゆ

○酒糟ハ粉ぬゝを切りまゞ園ゝあゝぐゝふ煉り貯ゝ置きをふ時ふゝゝてゝき人糞を合セ稲田ふへゝくゝ又紫藤葡萄をゞの蔓長く出ゝ抱ふ〳〵又松の勢ひあ〳〵きふ根まゝりゝ入れ又纂茂するゝり種樹書云種藕以酒糟塗之盛

○油糟ハ胡麻の油粕ゝ〳〵ゝ木の葉ゝ光澤をゝくすゝふ蘭葉らんふ用ひてゝ〳〵花壇綱目云荏の油糟ハ牡丹芍薬の類少〳〵で用ひてゝ〳〵但〳〵秋ゝゞゝりゝり

○陟釐ハ夏の肉ゝくゝゝ白くゝゝる時畑へ切りまゞ八月ふゝて麦をまくゝり

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

○米泔水ハ米をとぎ汁なり蘭百合もらん硃砂根紫金牛茶あゝ用ひてよし又香氣ある草木ハ溝泥ふかき所を含せそゝぎくゝり又濕淩の溝の土乾して節ひ植る土ふ交ぜ用ひてよし

○糠ハ炒りて人糞ふまぜ用ゆ粃糠を酒粕ふ人糞を含せ田の肥しふ用ゆ又ゑをぬりとそれよく孟宗竹の根ふあてゝるよし

○豆餅ハ豆腐の滓をそらのとをりよくくたらして用ゆ土へまぜて又肥土とそなす

○馬糞花壇綱目云寒帝ふいとむ草木ふよし又暑氣を

媼草ふを根まわりへ置くべしとゝふ又牡丹の根まわりへ多の内多く用ゆる所貯へおくべし

○馬尿ハ花壇綱目云人尿より和らぎ諸草ふ少づゝ用ゆ

○獸肉の類ハ涅槃經曰如橘得鼠其果子多とゝり亂を人糞汁ふ漬け変ぜくゝりて浮ける所柑類の根へ埋むる所を實多し又猫の肉の竹まわりへ埋ミてよしそのゝ外もろくの獸肉よく腐爛する時根まわりへ埋ミてよろ古き皮革類もよし

○牛糞ハ桃の樹を植る所牛屎ふ土とゝもに埋ミ置き春ふなり植うべし

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

○羊屎ハ立夏の前羊屎を泔ホ合せ蓮とうゆる时ハ花多し
花鏡云報春先用羊鹿屎和水澆又暑月澆冷茶

○猪糞猪屎種樹書云木揮當用猪糞又冬青樹凋瘁以猪
屎壅之則茂一説猪溺灌之又曰凡種花欲得花多須用肥土
秋冬間壅根春来著花自然盛以猪屎和土令發熱為肥土

○雞糞種樹書云雞屎壅茉莉則盛壅百合則甚滋生と
いふ今ハ烟草燈心草龍鬚ホの肥ホ用ゆ又菊桜等ホの肥ホ
まセ用ゆるゆゑ花の色よく出すこと妙なりもつともそろく
のゆゑ屎こやすよろし

○介類ハ蛤蜊ゑ恰その外もろくゆ介類桶ゑを入漬け置

こと腐りとる时殼をとりあげその肉を用ゆ松ホ用ひてよし

○塵埃ゑ燕ゑ花石菖萍蓬草烏芋慈姑ホの類草ホ入まて
てよろし

○茶滓ハ暑氣ふせむ草木の根まろくおきてよし南天
等ホ類ホ置べし

○草綿ゑハ桑の根まろホ入まて又諸木の根ホ入てよし又
油とゑぶりゑる粕も用ひてよし

○梳頭垢膩ゑもらんゑ木の類ハ根まろホ垂てよし

草木育種

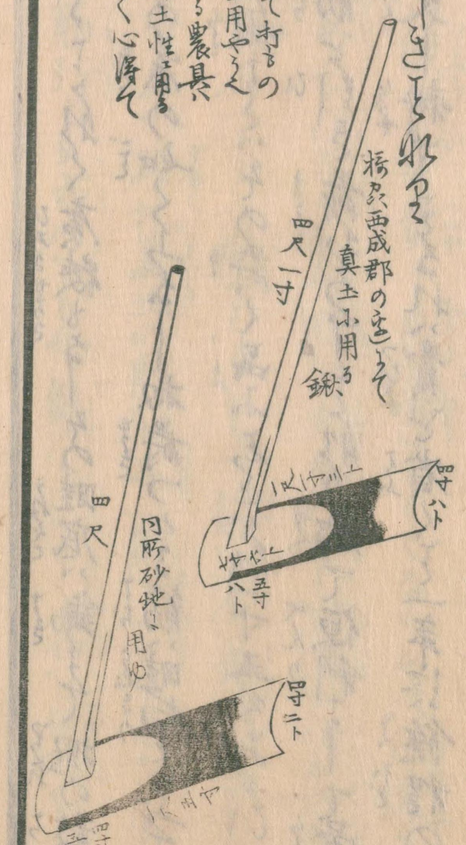
農具

工その事をよくせんとするに必まづそれ器を利するなり諸國にて農家の耕耘するを見るに畑ふくぶ鋤鍬のみを用ひて別に農具あることなきところ良しとはいへども昔よりの仕来れるとはいへども事を欠くとも思はざるべしとも識門の如くそれくの器あらば徒に日を費し力を労することなくそれ功速なるべし今その一事をいはくまづ畦を立てそれ中に小溝を切その両畦菜蔬を蒔くにも常に用ふる鍬のみをもて筋を立て耕おろすことなるべし畿内にては砂地真土の別なく弁へ鍬も一やうなるすなわち土畦をつくるにも筋引と云ものをもて假りに筋を付畦をなすゆゑいづれにせよ廣狭もその畦底は鋤にて塊の散らばるやうに箱の底の如くにするし扨耕つくる筋は畦切とりて幅一寸ばかりは小鍬にてその耕く品にもよれど一寸五分あるいは二寸の物を用ひ筋を引き耕おろすことなり都て便利にして労少なきやうに工夫し耕すときは費を省くこと一年に餘程の事なりこの益あるのみならず作物の出来ること遠ひありと云へともむかしより仕なれたる農具なれば鋤鍬をもちひてもさのみ事をかくることなしといひ聞へまさるべしとする者は一村に長たる人それ土地に用ひて便不便をよく考へて教へさとしするものにこそあれ

鋤鍬の製作

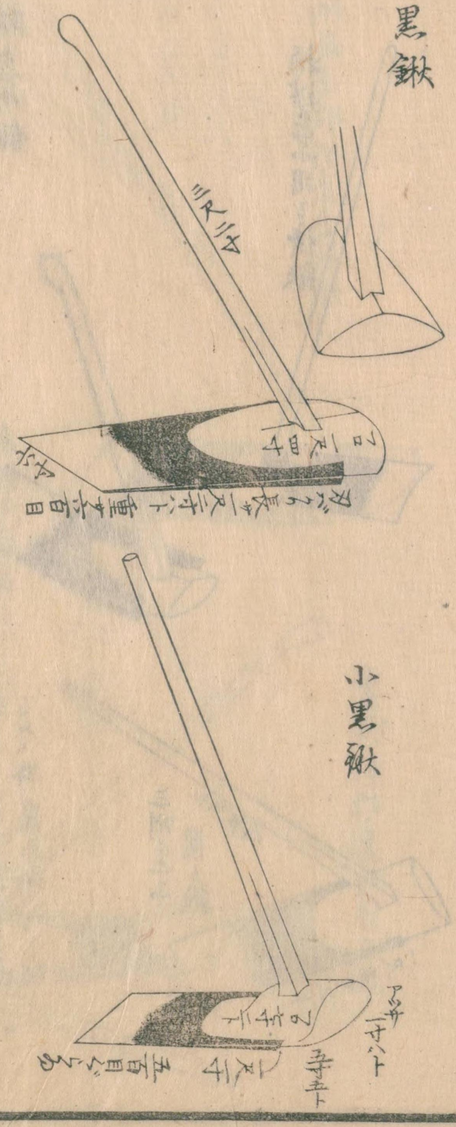
鍬ハ耕耘第一の要具にして百穀ハ云ふ及ばず人世日用の菜蔬ふ至るまで此具なくしてハ培ひそぐつることあたはずそれ稼穡のもとハもと身を養ひ命をつなくの基なれハ云ふ國家多大宝億兆の司命ともいつべく農業をいやしめそれ器を瓦砂とひとしくするハあるまじきことなり

諸國鍬の図



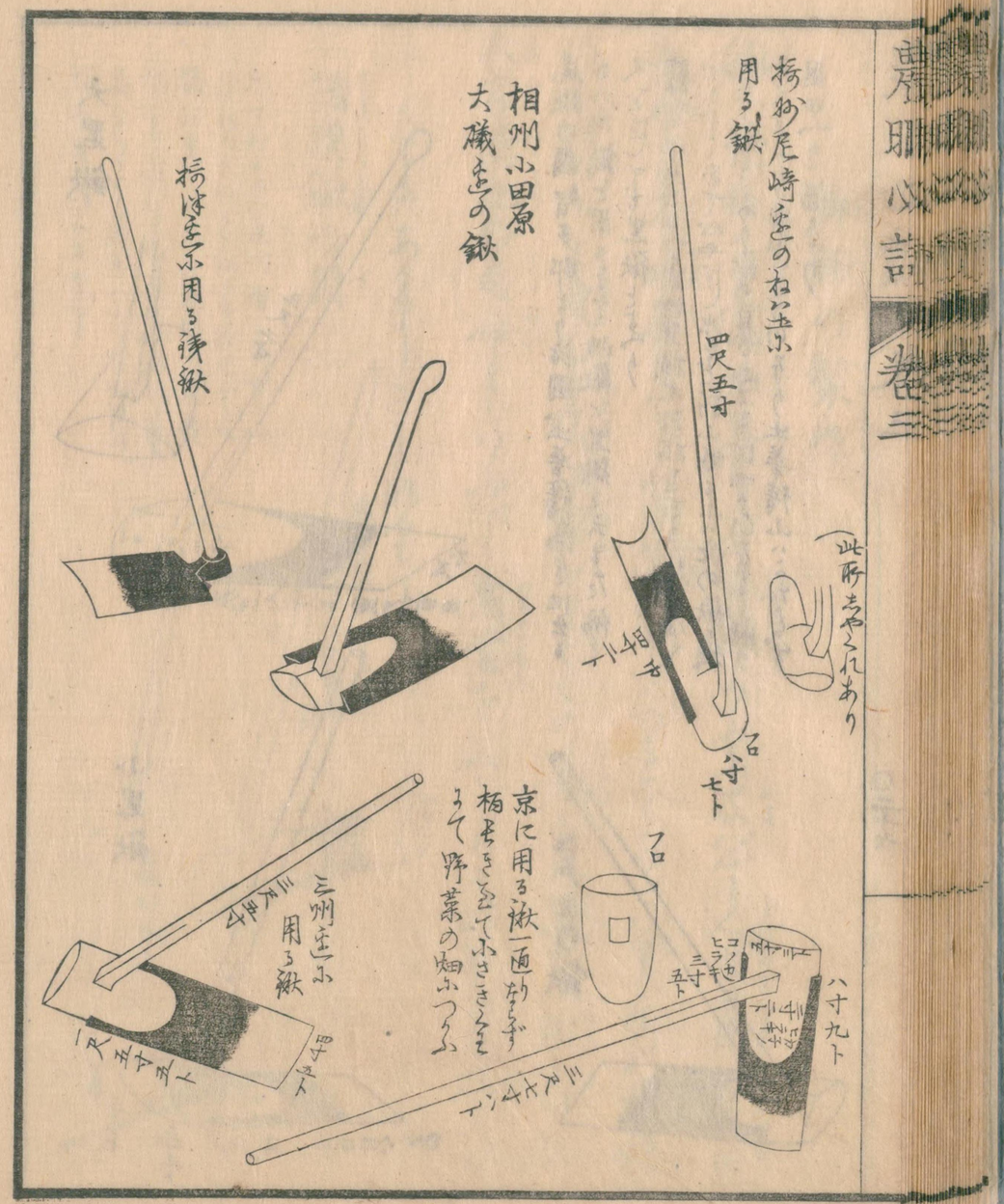
都て打ものハ泉州堺にて打ものいとれもきれよく細工も器用やすく摂河泉その外近國用る農具堺より求むるをこのみの土性に用る具なりとす送主ハよく心得て勝手よくつくるなり

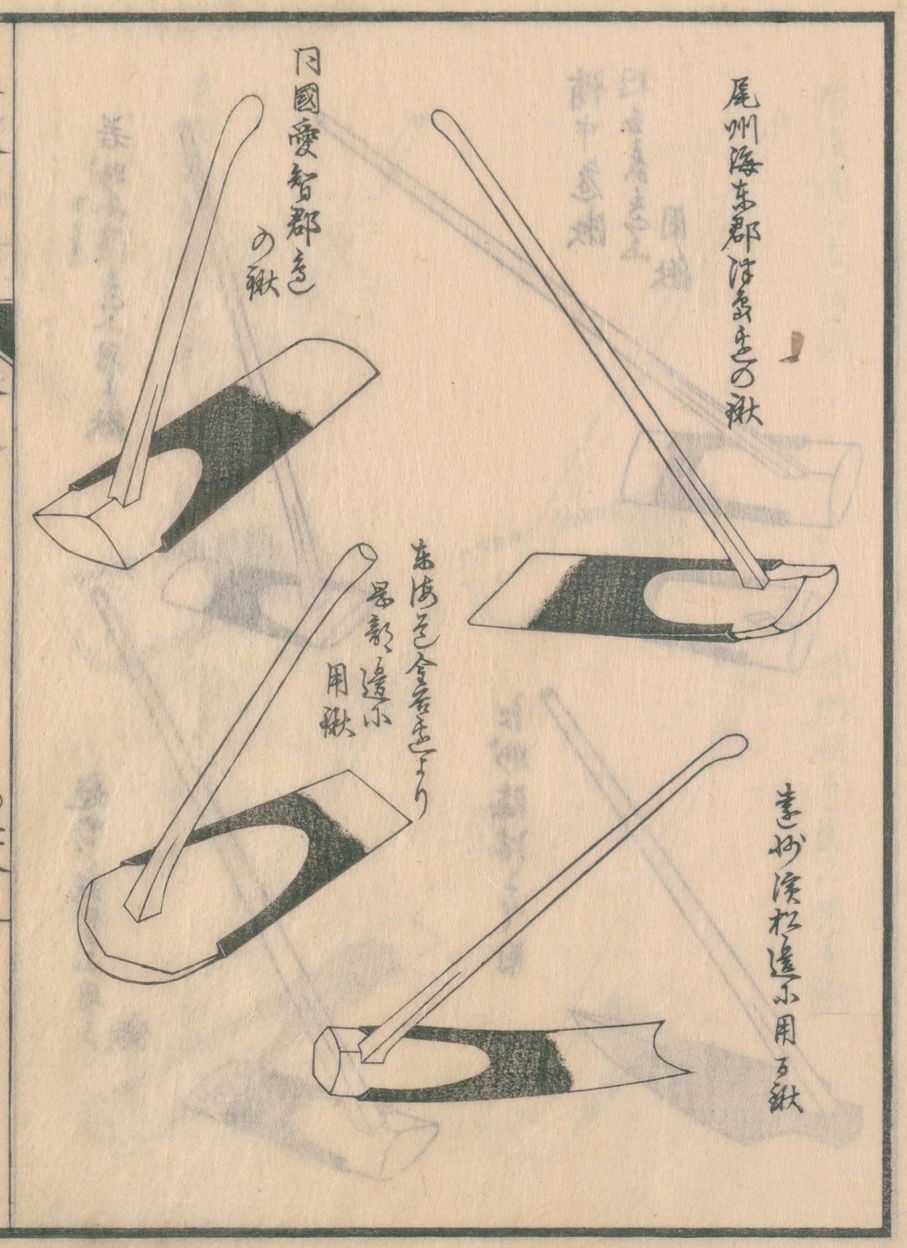
大黒鍬



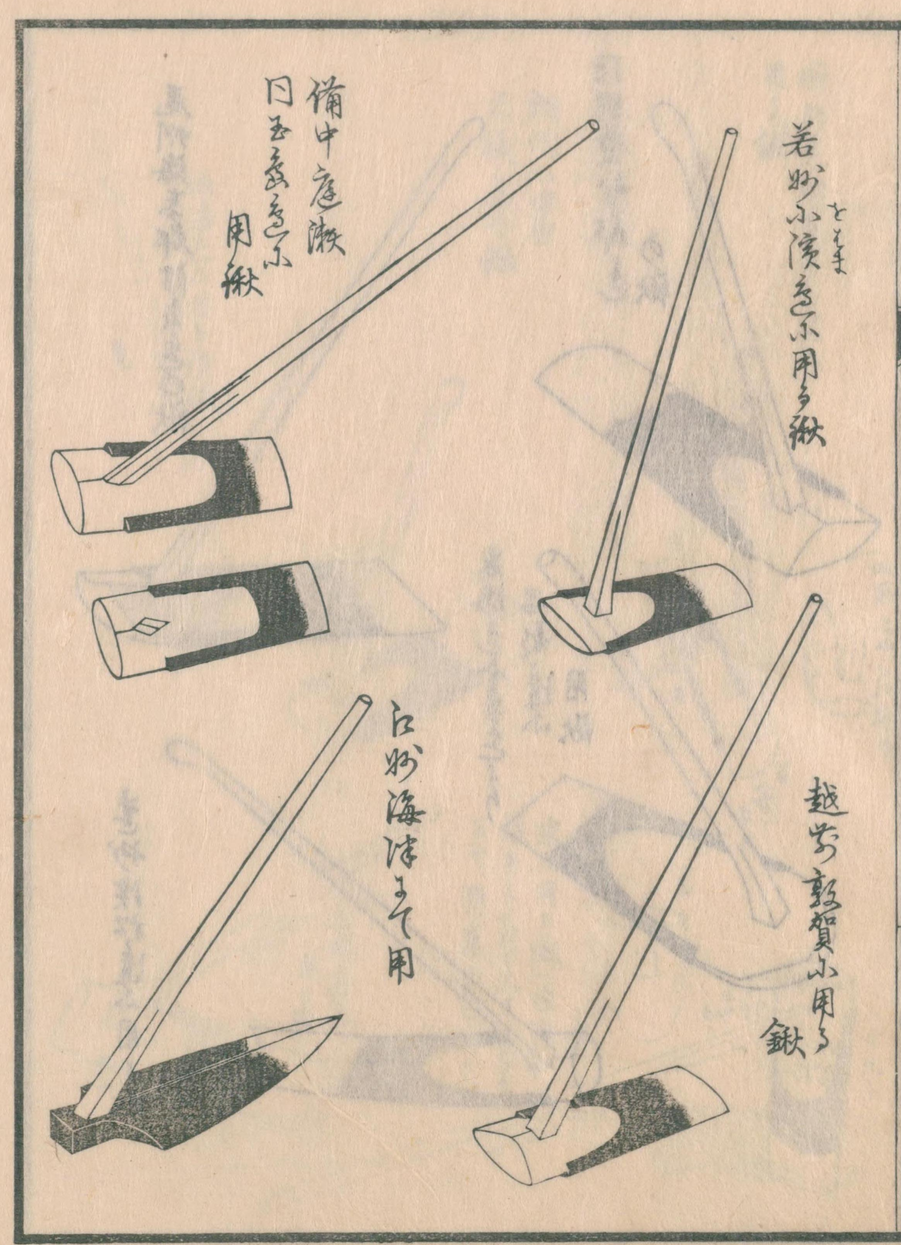
尾張の國智多郡より諸國へ出産稽働きに出るもの此鍬を用ゆるゆへ此鍬を黒鍬と云また働く人を也ても黒鍬とよぶり

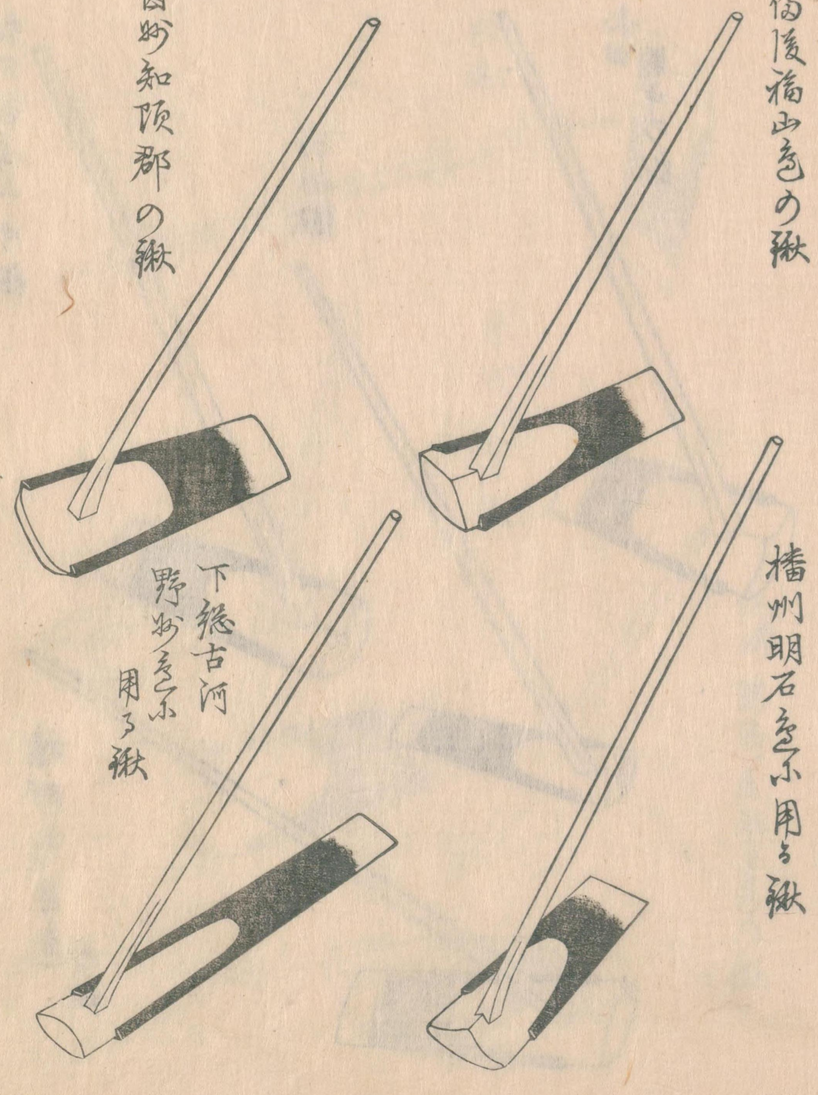
藪をほりうゑつゝ竹根木根をきるに豆腐を切るごとく至て心やすし池堀など新小堀ゑゝハ他の鍬三挺のもとらきあり鍬の目方ゆゑうゑつくひなるゆゑ時ハふくとより労少きものなり土産稽ふいなるゆゑ用ゆ一き器なり



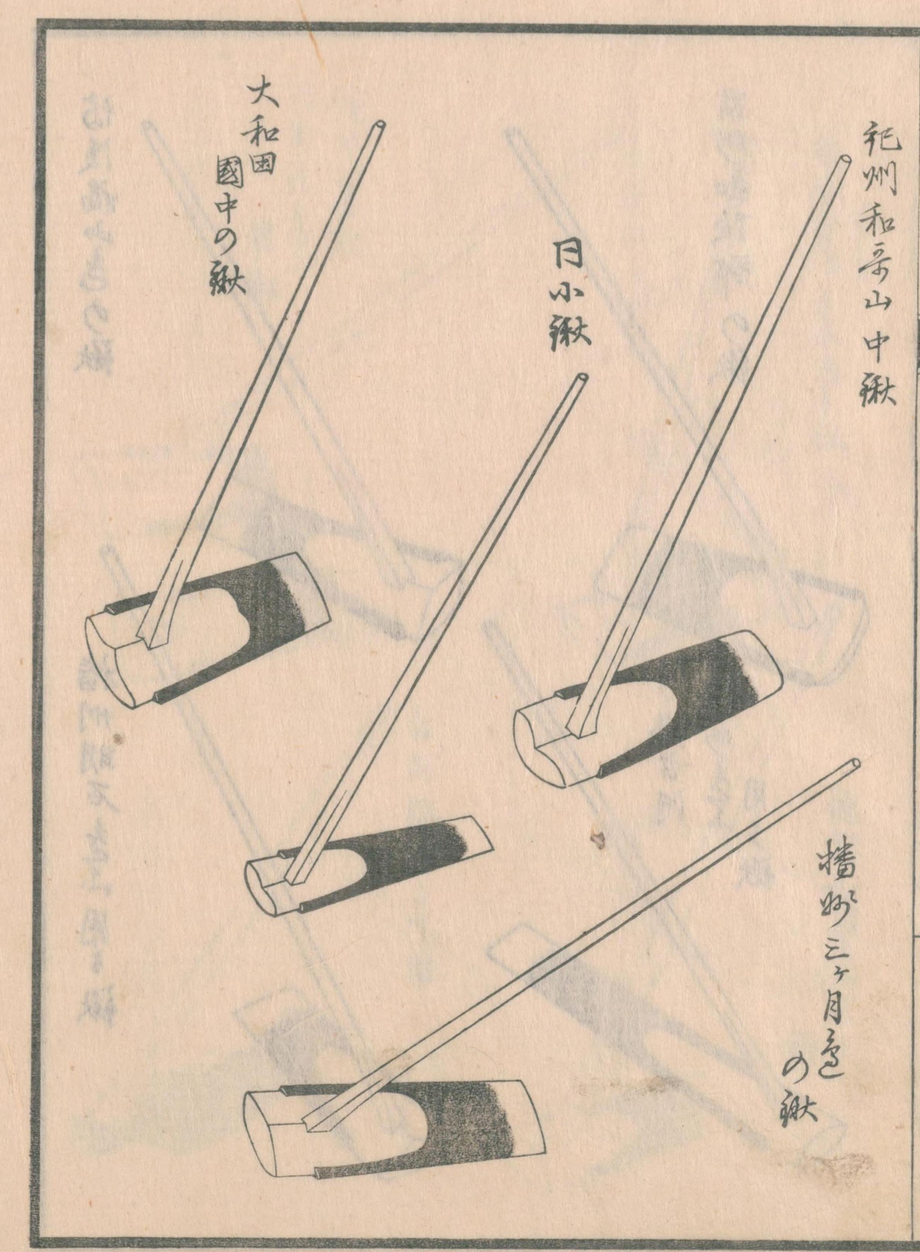


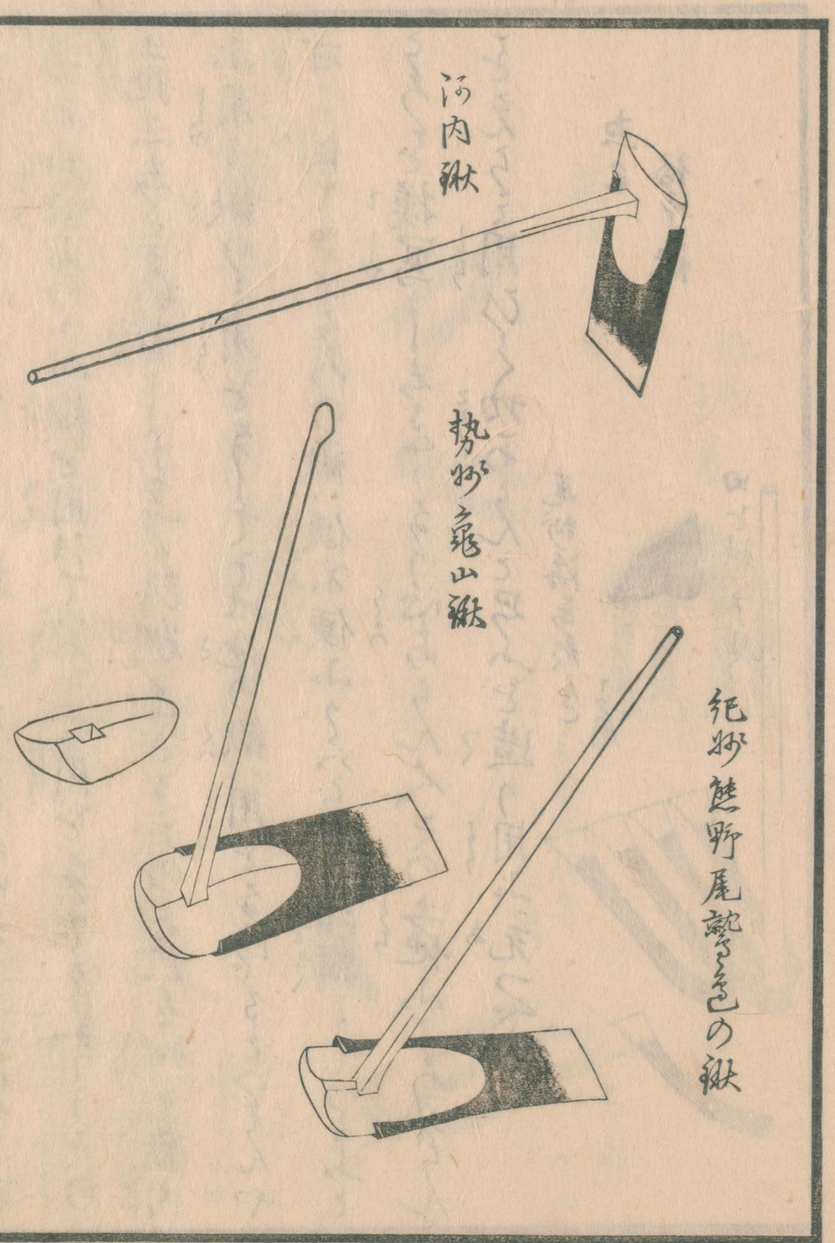
国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

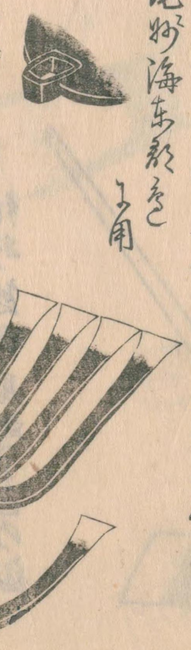




国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

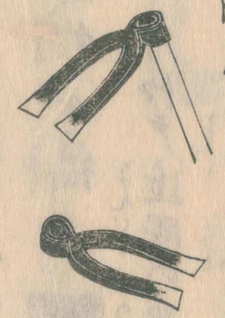
鍬ハ諸國ともその地ところ形も変れりそのゆゑハ土のねばき所ふく砂地ふつうふ鍬と用ひてハ少しも用をなさぬ如しその土地ふさぐひ昔しよりつくひ馴まてるそのあれを何ぞ畿内ふ用る鍬のこと用をなすてそれ他の鍬ハ用をなさぬといふんや右ハ図するところの鍬ハ便不便ふらず諸國ともそつくふところを摸寫しまるすまり心あらん人その土地ふよろしらんをえらこと用ひく功あらんと思ふを造り用ふ元つべ

尾州海東郡名
田を耕す具

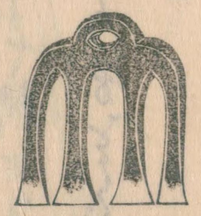


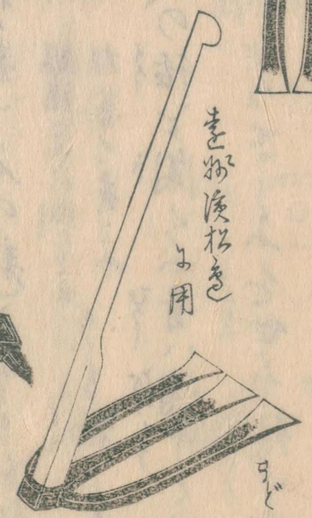
和名
備中鍬

畿内ともて用



摂州ともて用





尾州海東郡名
田を用

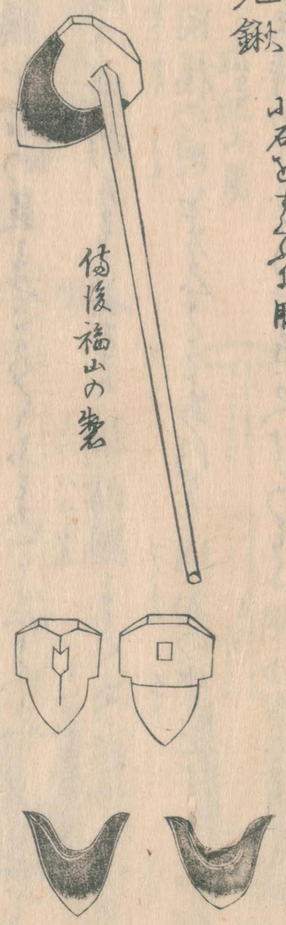
すど鍬と
唱ふ

備中鍬と称するそのそれ國ふくその形ハ少しで変りあまでも大体お似るともてるて備中と唱ふるより応備中備後ふくハこれを熊手鍬と云畑をとくそふも用ひるより餘國ともてハ田でもう小用ひまつ田を耕すふ麦を刈りく

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

後牛馬ある百姓は耒耜をもてすきおこしをする事日日
ふあてゝ乾かし塊をとりくさき両をまちゝ入れあてゝあ
ゝをとりて牛ふ馬把を仕りけるきろらしゝ田を植るなる
らしとなるとゝ牛るなるとき所りてハ此備中をもて耕し
元来源田ハうち鋤すふあれハ耕すゝ人の新くゝるる鍬乃
栖の向ふゝ竹をて編ゝる越後またハねと云根籠の類なる物とあて
耕すとゝるり江戸近國の農夫の話を聞くふ昔ハ備中といるる
そのなくして悪く鍬をて耕とゝるせしふを世ゝ備中鍬と
用る事既れわえしゝるり労とゝぐくおとすくるゝるゝすと
いへり

耜先鍬　小石をすくふて用

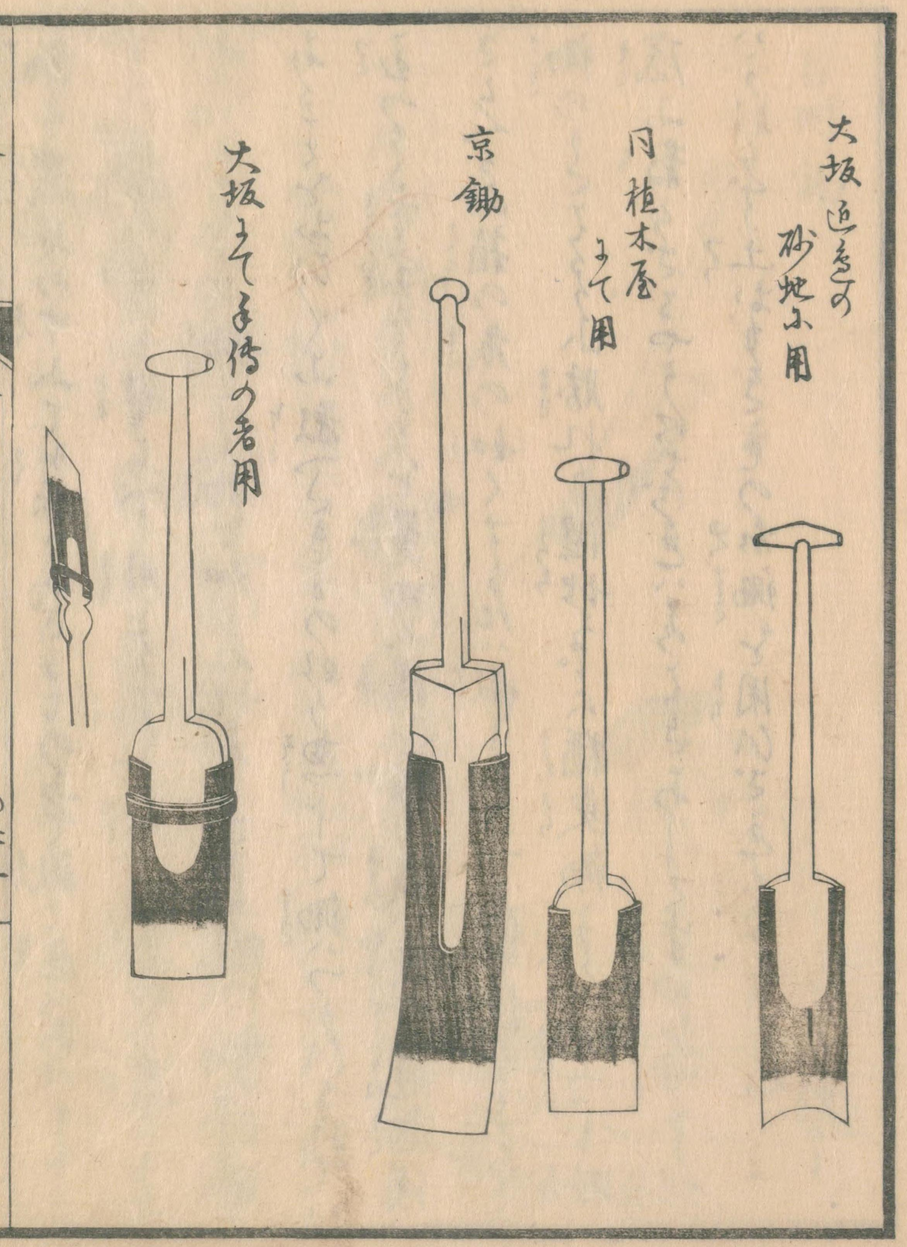


右の耜先鍬ハ鑄そのまゝにあげて石ふるちあてきハ忽
缺損ゞ碎くるなるとも孫石碁石のときに石れをき牡ハ
荒砂を堀るゝ静ふ手前ふゆるとこすひ揚げある
ひいうきとゝるなるとふゝ鍬助籠
便利なり

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

鋤ハつるひやう

踏鋤を関東ふく畑と耕すふ用ゆつるひやうハ両手ふく柄とそ
ち鍬の類と右の足ようそふくふこゝ左りくうくうくて耕す
ふ又一箇の便利なる具なり摂津國ふく当用ゆる添五郎衛
柔耜と因幡の用とをなすとあれとも作物の中とすき和ぐるとハ
あらずふ片ちゝりすきくすのふ用ゆるなり



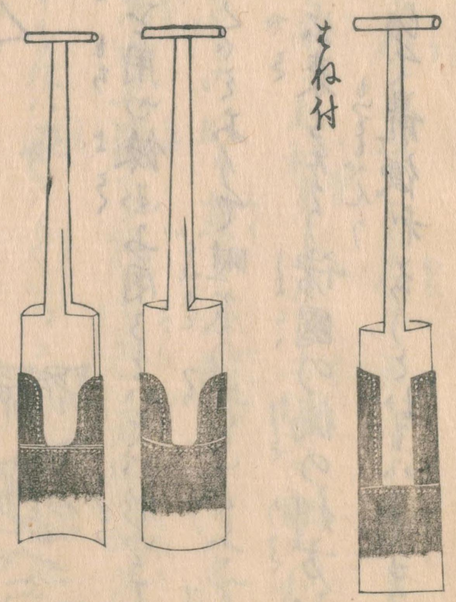
国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

鋤ハ農具の中ふてゝぐうらざるものゝ上て畝と並べあけてそ
こハ左右のそたも壁ふぐし用とするとたゝうことならず然ルとも
九州ふぐふてハ鋤とゝ物と知らぬ地多くさる土地ふハ鋤の利用
あることをおひくふ数へきもの多り想つゞて鋤ハつゝひるれてハ
ゆつく重宝なることを覚ゆゆ溝を堀り或ハ麦田の畦底弐
さらくるふ箱の底の如くするハ畝ふくハつゝひて便なるもの
鋤のゝこるゝふ勝れり湿地ふぐハ猶更鋤ふく塊一ツも畦
底ふ散らざるやうにせばをハゝるべきあゝ平田をつゝる地
ハうゝらぐ土おもきをの為鋤を用ひざをゝるなるなぬ
ことれなり

石州鋤

近江國栗田郡をふこの鋤を用ひ餘ふ用ゝるとハそれ形いとゝ大
ふして京摂ふ比べ少くくをあるて畦底の土をすくふ和て
便利ふして仕業きれいふ出来るゝゝ諸國の鋤の利方を考
へるふこの鋤田畑ともに用ひて最便利ゝとおもハるゝまふ
人ゝゝ教へつゝひおゝえさせゝきものあり

関東鋤



日出きり

右図のうち土切と云る鋤ハ土普請ふあり ふ用ゆるなりつゝひ方ハ向ふと左右へふゝ込ミ前より向ふへおして土をすくひてもつゝふ入るもふ四すきへまて者のとゝるなり右鋤ハ助薦

まあらけまハ堀りぐゝしさらつきする内ふねぞりある土代ふゝく切ふるくして便利なり○そね付といる鋤を池ゐど堀る時ふハゝゝらずこれ鋤を用ゆるなり向ふ左右へふゝ込ミ土を切り又ハ前より一ト ふゝ踏ゆて左右へそねあゞるとゝ凡高さ者丈或ハ者丈ゝ尺ゐど横ふ三間ゐどつゝそねあげるふゝ踏ゆるしさのゝ人力をつひやすとゝれく便利なる具なり土切とゝ云るゝ真土ふハ用ひ難しゝでねぞりあるやゝらゝゝる田土ふ用ひてゝとさらすべれなり

塩硝

塩硝ハ今火砲を武備の第一とする世ふあるとてハ専要の品也

ゝ不且火砲の勢ひを猛烈ふしてその功をうすハ塩硝精製の力ふあらずんハその術を施すとあゝそゞけて塩硝を製造する此次第ハ前日ふ家の床下の土を取り大こゝ拾二三荷へれてゝとゝくゝりその飲口をぬきそれ水を手引湯より少しあつくゝ底桶へ入れあくふゝまきてよく澄ゝるあくをゝまきと二ッの大手口鍋ふゝく火勢つよく段ゝ薬ゞつめ大方よゝさ時分ふ篦ふゝくあんぞいを見てさて篦のあんぞいよく時分中濃とゝして集とゝ二つのゝゞを一ッふあつめて火をとゝくと焼きけてそれより附ふゝり篦ふゝく煮汁を斧ゝ鍋1篦先より滴と落ゝ附を見ゝゝりけて附をよくハ冷ゝ鍋ふ濃ゝ

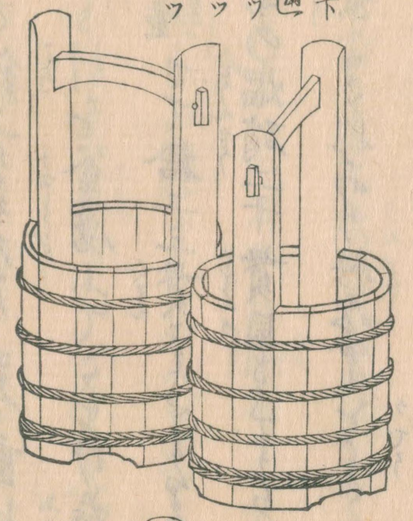
入ゝゞゝその翌日朝五ッ時ゝゞ四ッ前ふ冷ゝ鍋をみまバとぶゝく針ふゝゝりまづ煎けを外の桶へゝゝめねゝり鍋ふ附ゝる汁を釜磨ふてこそげ荷ひゝごふ入まを置く（これハ法煎焔硝上方の焔硝やハこの法煎と也）さて拾二三貫そゝまゝゝる時中煮をするゝりこれ中煮の焔硝二十貫目もゝまらハ清煮をすゞゝ清煮の仕やう別条ゝこれあり此次第とゝく覚へゝさて次ゝふ記す条くをよく合点ゝ又再ひこのケ條を見ゝる時ハもゝりせぬやうゝあゝゞゝ土ふ焔硝多くあゝを煮やう悪ゝゝまを焔硝多く取れぬをのゝり少くゝゝとハ出来安をと心得べゝ工夫第ゝゝり

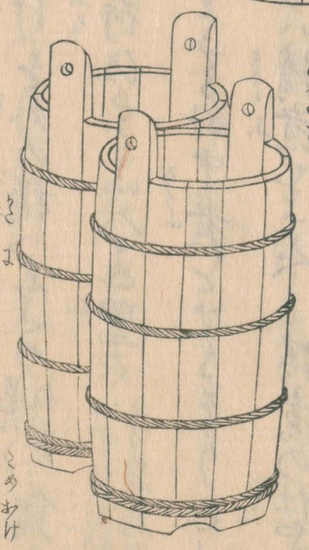
国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

図式

この塩硝一流社とる時の粗なり二流れ三流れとる時ハ二場倍三場倍小諸具を場すも一流れの時ハ悦を一人出り二人なりこの積りすて人数を場すなり

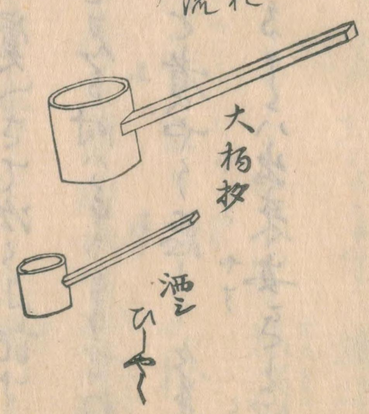
多積ハ下桶二ツ通
多桶一ツ
水桶二ツ
すて五ツ





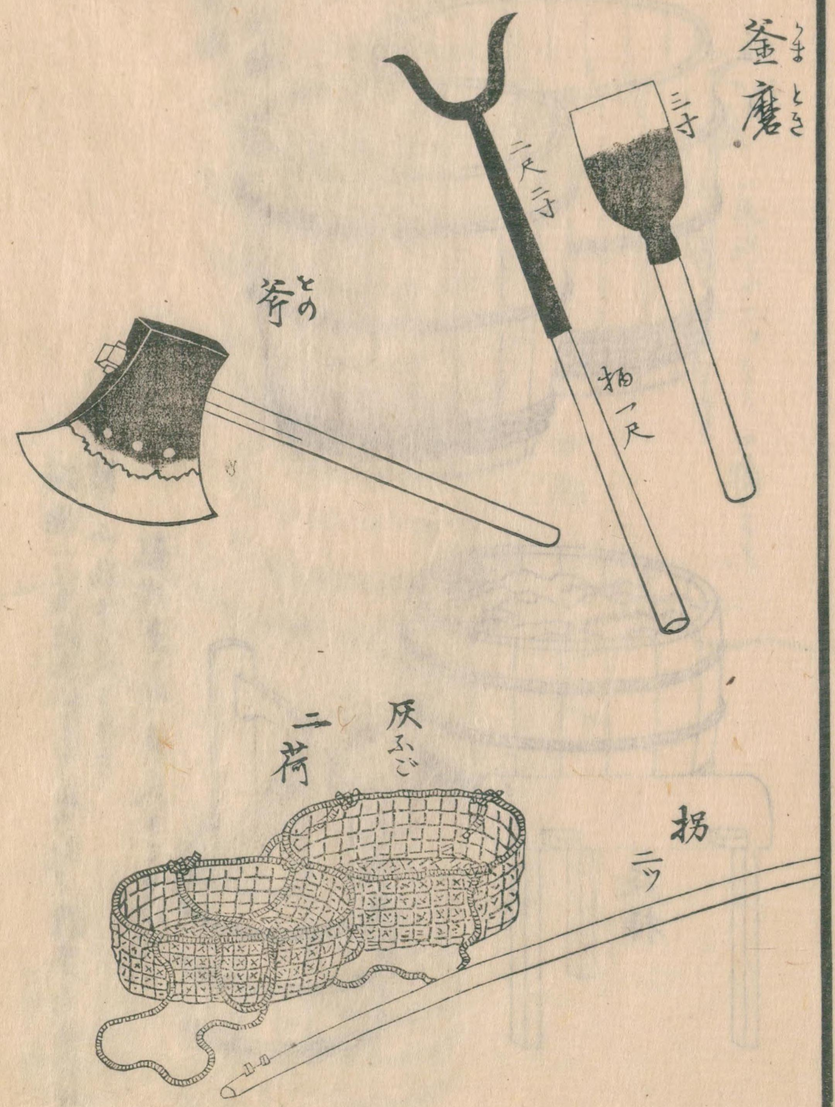
ふご

この片荷ハ沼荷の酒桶
小用中



大柄杓

酒ひしゃく



釜磨

三寸

二尺三寸

柄一尺

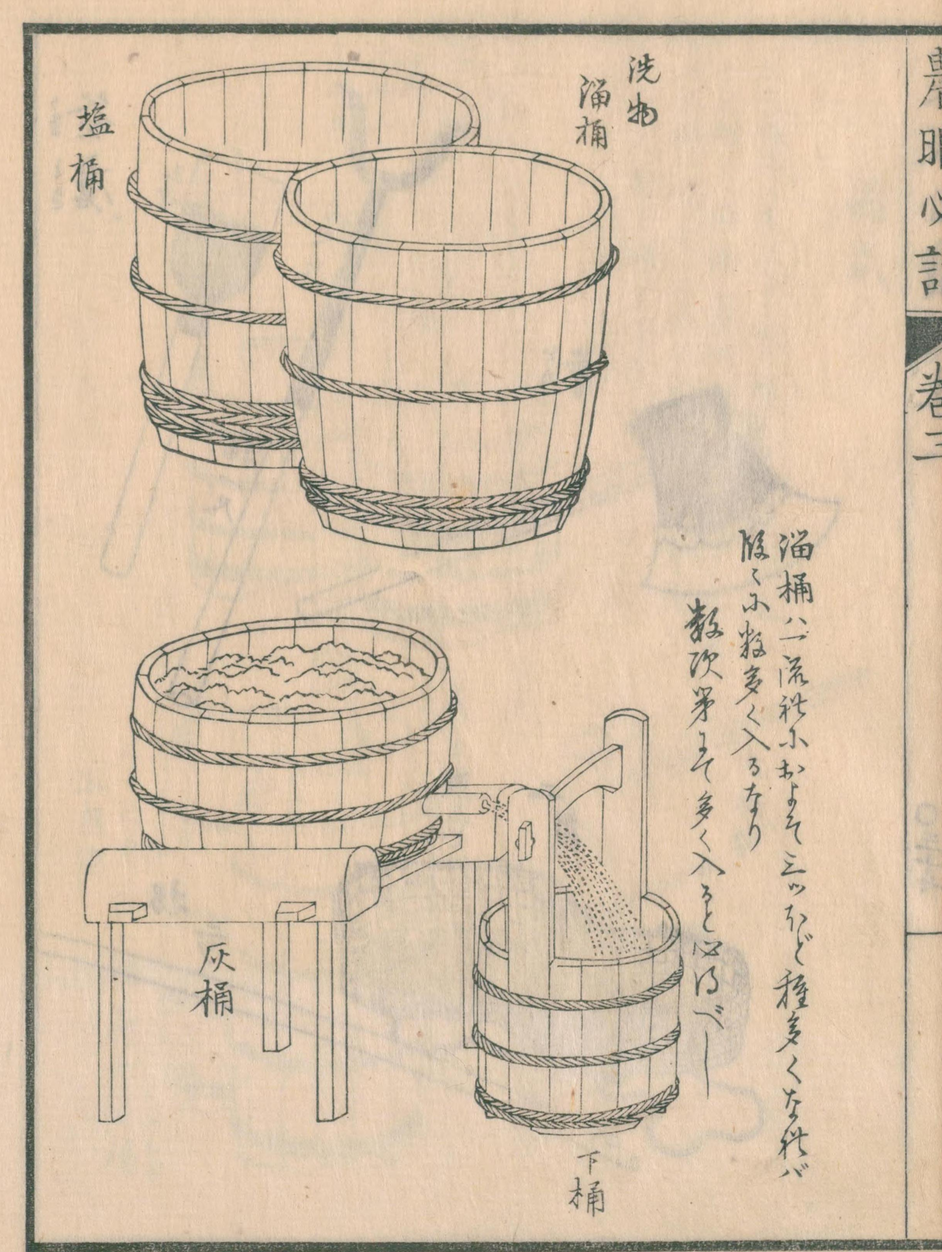
斧

灰ふご

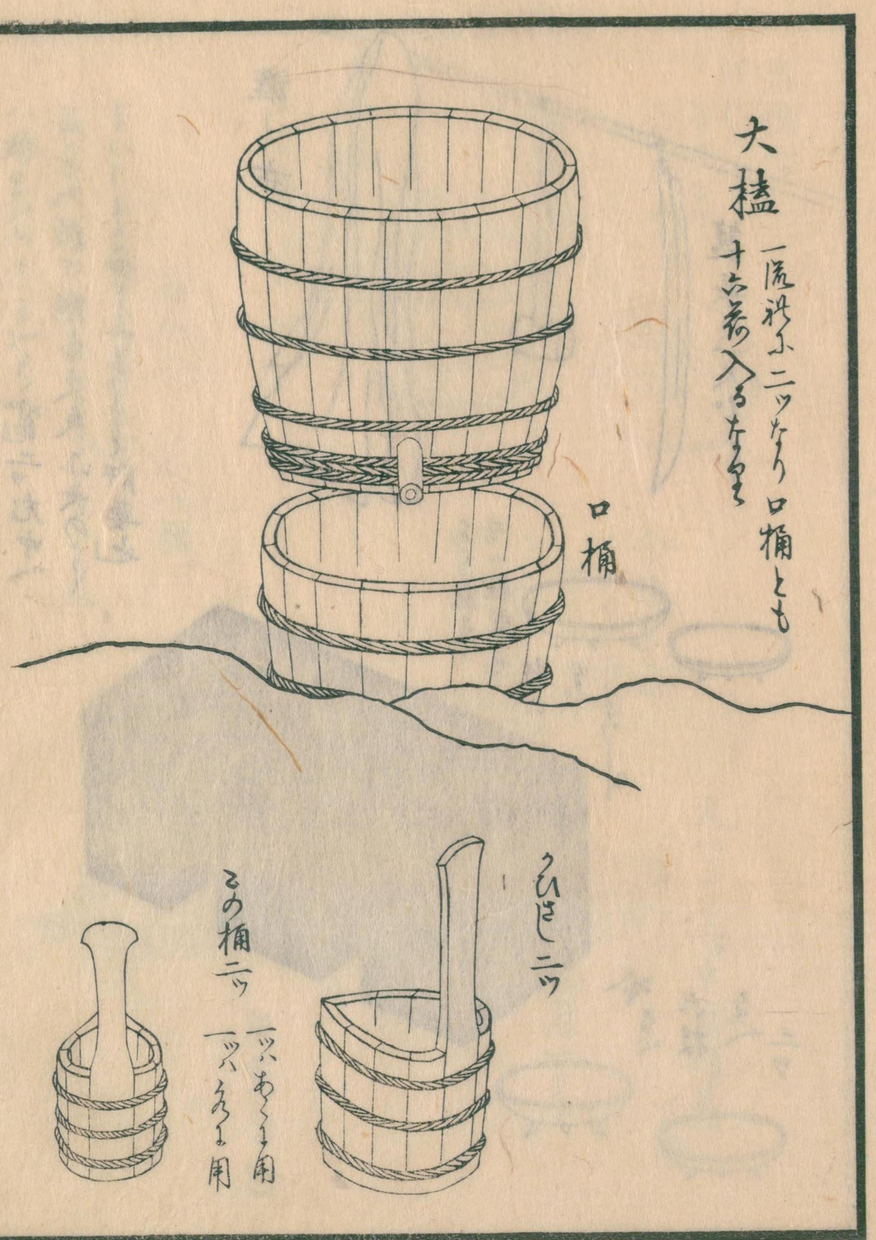
二荷

扨

二ツ



淘桶八一斗程小おなじ三ッなど程多くなる程バ
除くふ数多く入るなり
数次第にて多く入るべし



国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

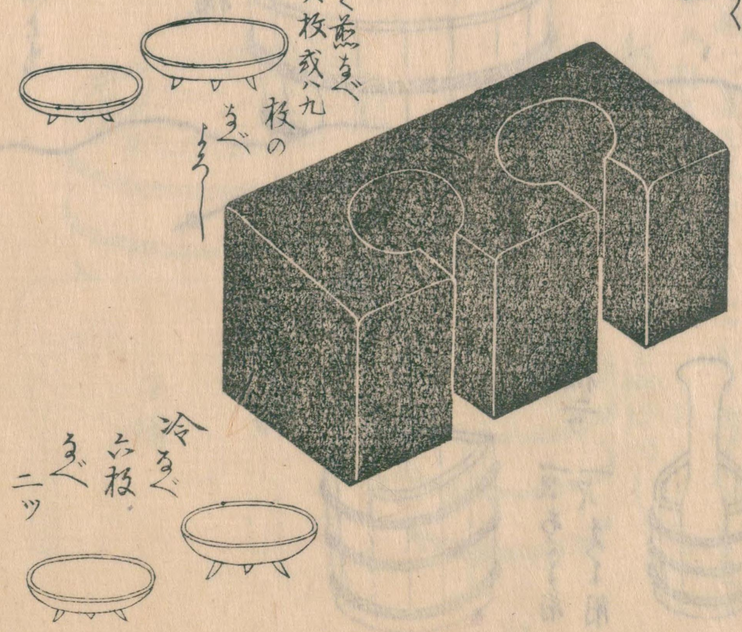
八枚なべのうるべき竈二ツ尤中へ
石を入れて随分丈夫ふ大のうく
まりうきやうふたるを肝要也

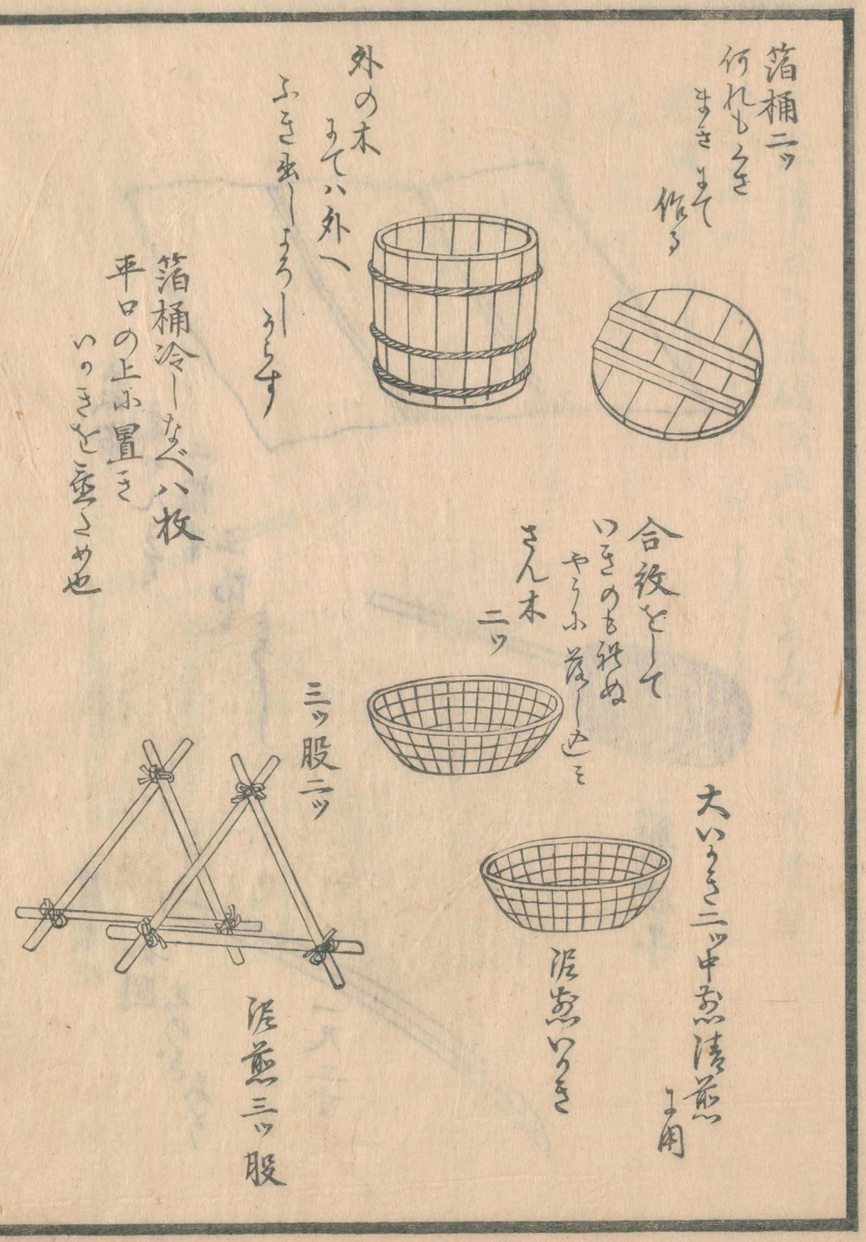
漉布

篦長さ一尺ぐらい

あく煎なべ
二ツ八枚或八九枚の
なべ
ふたし

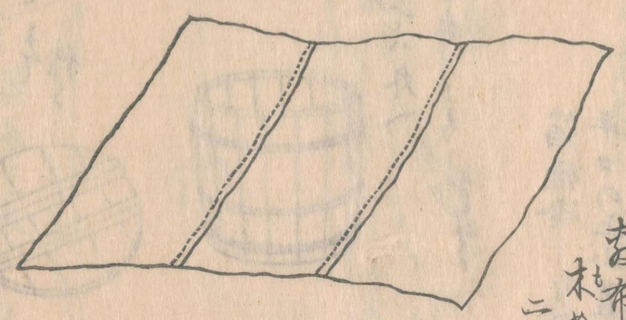
冷なべ
六枚
なべ
二ツ



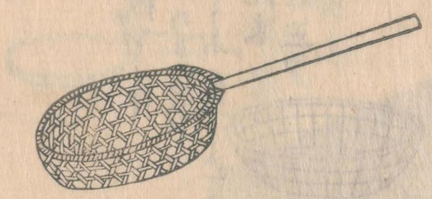


国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5

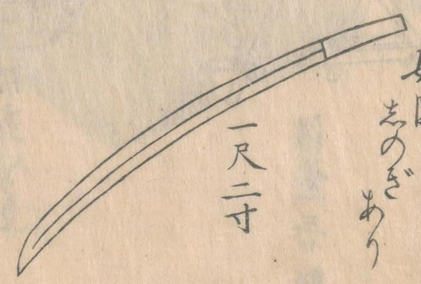
ガラス使用



麦布
木もめんにて
二幅半
三幅もよろし

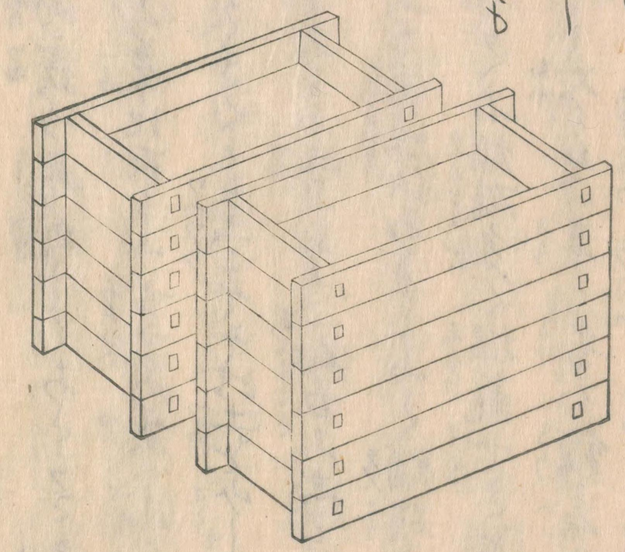


籠杓子



竿木刀
如図
ものぎあり
一尺二寸

中煎清煮に塩硝茂此のこうそくへ紙て干す
凡一流れ十二三枚にて よろし
塩硝へ取れ次第
数ハ宜しきたしもし
急なれハ
こし針ハ針ばり
干すべし



国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

土論

山たての大石は下ハ雨露の辛く久しくあたらざる所ハ自然とこゝにあるものなれども常に取るハ古家の床下ハこれあり氣土といひて百姓のこゝろふくさくと云土をそゝぎ土を少しつまして舌のうへハおきひりくと舌をさすこゝる土ハあり一向舌ハ志ざる土ハ焔硝なし　京ハ志こゝろハ甚味ひあるこゝろハ焔硝と塩とのまゝる味ひ西やうこれありとくハ焔硝多く塩氣少きを好こゝろこの味の試ハ紙上ハ述べ難し大らそハ辛く苦く鍾こゝろむやうなるハ塩多こゝと知るべし甘辛き味こゝて軽きとこゝろに焔硝多し塩の辛き味の外ハ舌ハこゝる辛き味あり焔硝の善

悪多少ハ知らず焔硝ならびハ塩の善きハこれなし　焔硝の善悪ハ土ハこゝて知難し　○土をこゝに床の下へ這入り図すること　こゝろハ釜こゝぎこゝて或ハ二寸に五七寸の板こゝをもつて土をこゝ守たゞこゝそゝげとる土板をもつるハ不及たゝばひて掻出しく床の下へ這入こゝり口へこゝ出し灰とふゝこゝて荷ひとる尤こけらくづ或ハ土こゝそぬゝ上げこゝる火燵こゝの久しく成る土のこゝまゝハこゝくこゝ焔硝あり土を四五寸下ハ無きそのこゝりとうく土ハ落く四五寸下ハ取ぬゝがよろしきこゝて家の為ハ掃除致し塩の土をとる加ハてこゝろ　叔焔硝多くある家ハ壁ハ五六寸も這上りあるこゝのこゝり又白焔硝の粉の如きものこれあり

素人ハ焔硝のやうふ思ふそのたれど味ふあらず形ふあらず色ねあふ嘗て知ると心得ず〜○土ハ赤黒砂小石交り何色もよろ〜とうく味のところ才一より塩っらきの辛と又外ふ辛き味ふ〜て舌ふ考ふ心味ひより嘗て多少を知るる功者なり砂土ハ色ふ小石こけらこづ〜地の古竹うんるづ手斧こづるどまぶるるるハるふてされる時ふもれ易くよろしきなりこれらハ一流ふ取るうちふハ知ることなり○焔硝焼ハ九月末より正二月ごろまでなりそれもそれ節ふより寒る時ハ三月まで也春なりと云ハ二月より三四月初まてとるなりこれハ焔硝の性よろ〜うらずとうく九月末より餘寒つよくハ立春の後まても

取るべ〜寒中の焔硝ハ格別性よろしきと述べべく〜

土を取る法

土を取るハ始めうく土を嘗て塩氣のある色を定めて二人して灰ふぐと持行すのこれをく這へり釜磨こて板の切ふの類ふて土代二三寸こそげ岩ぐ土のくやり竹切れこけらくず少焼の土ハ類古きハらぐくを塩氣の取りつきあり限く這入口の長くハぐを一尺あるを四方ふ切崩さハ隙ふ自由ふ出入るるものゝ日ふ二人〜て十二三荷て大樋の垂き猶〜荷ひ入るるより拾三荷て何ものの日ふくも煮るを〜と流れとうひ二流三流煮ハ二十六荷三十九荷より多くて始ふ土代嘗める時ふ家数多く一流煮二流

煮あるとゝ云凡四五十年毎の処ハ拾二四荷ハあるものゝ土堅くして取れゝゝるとゝろハ取るべからず堅さ生あぶらくゝゝる土ゝゝゝきゝ例の嵐土さく畠家の肥しふ用ゝる土の類ゝゝ土の倫ハ条併七考ゝべし大槌へ入ゝ時ハ能くゝと入ゝるべからず泡ふと静ふ土のつくりとゝるやうふすべし一向ふ土ばかりふて八ゝ濁り無ゝゝゝ故ふ木の切きあゝるひハ古竹ふ石ゝどゝもゝく苔ふゝひくそれ上ふ焙硝を附きてあゝるものゝゝり槌の真中ふ土と杉形ふ盛ゝ上け仕廻ふそゝくゝと土を一文字ふすべしあゝつゝ堅むゝゝとゝなゝゝ肝要なゝゝり

灰論

灰ゝ木灰本稿木灰蕎麦の灰綿実の灰火焙の灰火鉢の灰釜の下灰と用ひ藁灰小麦茎の灰用ひず扨灰ふハ大ゝ口伝あり

さゝくバ茶の加減の如し垂れゝゝふ土氣塩氣灰汁氣とゝふことあり煎法の所ゝて考ふべし土氣の強ふハ焼く時ふさあゝゝねバゝを出ゝゝゝふ灰の性強くゝゝれハ土氣去ず塩氣ゝゝさハ焙硝少し灰汁氣強ふ灰強けれバ澄ず尤澄む澄まざるハ灰漉の仕方ゝゝありそのとゝろハ紙上ふのべゝゝとく灰のあんばい大良ゝり船頭の楫取り焙硝の灰ゝゝと心得べし上手下手も灰のゝり合一ゝゝり綿実の灰紺屋ふ用ゝる灰ハ外の灰ゝり性強し故ふ土氣多き時少ゝ外の灰ゝ加へ用ゝゝり

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

加減灰と覓てゝ灰の糟これ又肥ふるなり

中漉

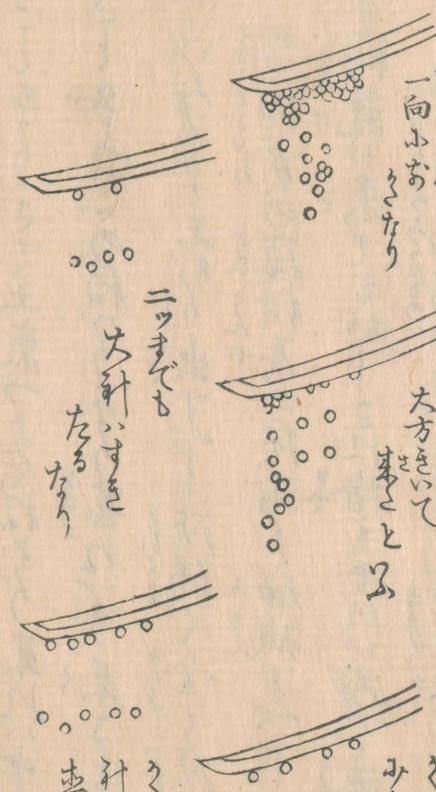
おゝそハッ頃まで焼き中漉しとゝいふとありこれハ土氣多く
ねゞり強くあるひハ塩多きふるまひなり三ッ股とゝぐの上ふ蓋き
籠を居へしき布を敷汲こゝ共ハ塩殘るなり此の塩ハいまゞ
煙硝ありとして洗ひと一所にして又翌日の灰漉ふ入るこゝ也
扨中漉として集までハ火勢も強く焼くなり集と云ハ多て
の秘事ふまるこゝなりこの時筧先の見やう次ふあり諭ハ
沼蓋の煙硝五貫目をあるべきところ三貫目をるきやうふ
なるものなりこの中漉ハ土氣なるらびふ塩多き時ハ是非なく

することなりさて土氣つよくねゞり来れバ中漉すべし病けが
来さと云ふハこのねゞり強き甚ねゞり来るときハ布を出ぬの
ふりいろくと考へり出すべし灰弱く全く灰あく来ぬゆへなり
これ時ハ綿実の灰紺屋の灰ふくく加減すべし功者のいるところ
なり病氣が来てもおしさに捨もせびいろく療治するこゝなり
こゝふぐら翌日洗扨何ふうよつけて中く五日や十日ふてるなるこゝハ
なしとゝく蓋汁ハさらりとするを悦ぶこゝなり灰の故ともやく
心を付くべしこゝる灰のつり合あきなり起ることゝて上手なり
煮るも下ふ煮るも此の処こゝ布より漏れぬなどふねゞまバ
考ふ人ハ捨るより外なるし五七日もつけまハれハ結句捨るなり

るらんう

集

篦を朝より鍋ふ入まゝくさきおくうり抜すくひろるゞれて
ざらくと滴りを落ちて徳ゞくし



如是針多きを集の布濾るとろ大事なり此露の
味針のあるを秘して見すぐるゞ前ゝくするふいろく
ちぎらすとゝりまを取り此時やうく見付ると云木刀滴露
の緼と覓ゆるを書るハこの事なりけて篦先きゝろ
き時二ッの鍋の煎じ汁を一ッふ集めそのあき鍋の上ふ三ッ股
と置籠を並き表布を表煎汁を汲濾しゝくきろりゝ
少く塩のこるゝも洗ひものと一所ふして濾し仕まゝ
ハ丈とそろくと焼くゝきより始終ゝの後ふ居てひさもの
附ふるゝり

附

附はあまりむつうくのきものれう右の篦おて集とすること
とく煮汁をすひ露をとらくと鍋の内へふるひ蔵しゝ
つく篦先ふれるゝぐふして縄う斧ふ篦先ふくぐちくと
つくやうにすきハ露をち〇如此餅の形ふるとさふし
堅め爪ふてぎいと押して乃ち附〇くの如くれ大さふ絞つ
さ餅のごとき物ハふゝゝて向ふ行くふう亟格ちうちぐ
時節早ければ涙ぐむと云てびゝふくと去て餅くづるゝふう
その附ハ又そろくと火と焼き松割木二本ふもえるひ一本
くらゐちろくくるそり七ふる日の入る附ふふもるうてさし
鍋ふ入るゝれと仕舞頃暮ふなゞ一日の垂れ乃ハ遅くとも

てやくとも芒此一日ふ仕舞と心得べゝ

種

業とするひとの者々年々ハ種を貯へ置けども火術家ふて
製するふもし種なれば加州の清蕈を半斤ばかり粉ふ
て中漉前ゝ煮前ふ入てはるゝ

中蕈

三四日の清蕈を荷ひ集めおく拾四貫目より拾七貫めくら
ゐふちるくらバ中蕈をすべゝ乃加減大事ふうすべて中ふハ
人ふ見せぬちりて清蕈の煽消何貫目ふ乃何升と云こと
なきいむづゝきこゝハなれとも泥蕈の出来不出来ふく

誠ふ目分量吋おのぞんて加減するとなりこれハ汁出来も
よろしきなり悪き汁ハ多ハ一寸四五分沒てより扱消し
薦といひて俵をあふ浸し垂くなりさて釜の下の焼きハ
甚ご大事なり奥なりふえ高うふ火勢つよく焼くなり
ぶつくといふと忽ふ吹きこぶれそ是とりふ間もなくこれ
吹こぶれるものなりこの时塩をけをすることいひて塩多きふ
ハ奥なりふえ立ぐらくすると声をとうけること
直ふ薪をとり出濡き薦をなだやくうちこ込て火を消す
なり

清煎

こまハあまりむづかしきことあらず土氣も塩氣もなき
同やうのものふ消し終もゆるりとおてようきなりあふるきこと
をこしたるもの只むつかしきハ中煮なり清煎のろ
加減ハ一斗ふ八合より一升までなり塩氣の多きハ一升ようき
なりとられもぐらくと沸あがるとひと火を消するなり火をとんせるも
箔桶に漉し入るを中煮と同じこれハ中七日前後九日水まて
晒すも中煮と同五七日も晴天ふ干すへし晒すふ多く
つゝを隨分色白くなるようなるこうなるなら貫目耗る故ふ多ま
なくてよく晒すぐ上手なり○箔桶なり針大ぐまりを
なりいぐすすへ中煮の如くすれば是粉ふなりそは煮汁

とをさこ吹ゑをとくをてらせ汁を取り扨釜磨まして八筋ふ
桶ぐるへるかとふ底もくるりと筋と付け切り蓋とよくしめ
握りて桶のそこの色よりそるくてけばひきまて桶をさ
ハなを色るるり自分の焔硝ハ粉ふりても性ふつるとも
なを色とも見分ようさハ大針たくまをとぬひさて中
煮と清煮すを色ハ三割耗るるり尤中煮ハよるれバ二割ま
耗りふを出来るなり中煮ふもより又清煮の煮加減ふ
そうるなり

按ずるふ夫宇宙いまぐ大陽のあらざる前ハ只一個の
寒氣あるのを既ふ大陽ありて又一個の熱氣を生ず

二氣の和合ふ萬物を生育す寒氣を陰と稱し熱
氣を陽と称す陰中ふ陽を生じ陽中ふ陰を含み環く
端なしこれ天地の造化と云ふ天地造化の間ふ在りて
も二氣の感合を待ずして只一の寒氣ふよりて生ずる
ところの物あり名づけて硝石と云この陰寒の氣久しく
地土ふ含まて発生流散せざる時ハ聚結醸造してこれ物を
生ずるなり塩鹹と雑生混雑すれども固よりそれ性と
異なり塩鹹ハそを大陽の熱氣地上ふ含まて釀生する
ところなりこを亦発生流散せざる地ふ移て多く聚生
するふ故ふ硝氣在るところの地塩氣もまこ渚ひあり

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

海潮の如きも日氣海ふと射照するふようて生ずること
ろふして地塩とそれ性と同くすることふ又一種の物あり
大陽の氣地上と照し燥すところれ膏燥ふようて結成
して生ずることを硫黄と云此硝硫塩の氣地上ふありて
植物と發生し動物と育養す水火氣神と鼓動する
ふるてハ雷となり霆となり海と傾け山と裂く古哲こ
の運用を假り硝硫と以て火薬と製す火砲の妙用即是
一個ふ天地の運動硝硫本これ陰陽の二氣これを身ふ
蔵する人竊ふ造化の主宰ふ比せんと火砲硝石を浮
さまバ甚妙用と施すことあるべし製硝の砲技ふおける

實ふ始本と云ふべきなりそれ製ふおけるその工と格め
ずんバあるべからずその法土より採ることろれ硝こ多し
得ること極めて多きとその爽むところれ塩氣汚物全く
除き去ることの二つあり土より採り得るところ格く
多このらんことを欲せて煎法その理を究ふあり夫
硝石ハ本一陰偏氣の聚成するところなるがゆふその
形と凝結することを知て難し法ふこれを考究する時ハ
蒸氣ふ飛散し又粘汁腐敗しそその氣を失ひそれ
形と成事をはず灰の陽事と假りて然らくその形を
現ずこの氣ふ灰を下すれ加減煎法の緊要とす硝そ

ゑふ同く陰氣の聚成するゆゑ故ふ陽火勝るときハ燥乾してその形を減す硝石を赫火の上ふ置て炎滅して痕なきを上品とそこれを煮る附湯中ふおいて形を結成するとゝの〻ることゝ〻ふ冷るふ随ひてその形を結成す塩の如きハ火ふへてその形を減ずゑふ浸してそは形を失ふそは形を失ふとゝもそは氣を失ふとゝ〻これを煮るとゝ〻湯中ふ於て販ふその形を結ぶこと硝と塩との別也此理を知り好るときハ硝中交じる所の塩除去の法亦おのづから明知すべ〻こと製法の大きふゑて先これが理を究めずんハあるべからず人常ふ云硝ハ陰精なるゆゑふ

火ふ近づくことを畏れ悪む火を畏て避け去るの勢強烈なるゆゑふ故ふ火業の用を考すと云此言固より無き之ゑ〻ども此物偏陰ゆゑて偶を得ざるゆゑふ故ふ不足ふ遇て驚愕顛倒すこれその勢悪ぐ避去らんとするに似る所以なり古人性寒と云ひ性温と云ふ共論行こともその一端を辨ずるふゑ〻ぞ

造編

あづからずといへどそは理を云こと甚詳ふして且盡せりとゝ〻ふ附記す

再云種硝として作り塩硝の法ありその仕方一ならず瓜の類の腐りたるもて製するあり又魚の腸もて製するそ

あり共れども山田森重とゝふ者先年平に傳へ伝ふ
暑中ふ山艸を刈り取り土ふ埋めて作ると云この法最も
勝れたり又云土と撿をると舌うて味ひ入るより外ふ試
るの法あり味ひを知らざる者ても消氣の有無明らふ
知らるゝなりこれらの事ハ紙上ふ尽るてその意をつ
くすべきふあらずあるべながら聊うる事のありといへる
ことを知らしめんがためふおどろかしたくるり
又云塩硝を製するの費用の積りの委しきことも尽らぐ
ありむうしるを塩硝を焼くふハ薪の費ふ多く物へ入て
都てそハ製造なりぬるようにいへる人もあれとさにあ

らぞその明細書とこゝふ記さんと余紙なくとゝそれ
焼方ふこゝを又紙上ふつくすべきとふあらねバ志
るまず心あらん人ハ来り問ひあきらめてよろし

李梅

農暇必讀巻之三終

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

江都書林　下谷御成道　青雲堂英文藏板

小學本註　二冊
扶桑蒙求　三冊
題画詩類鈔　二冊
三大家絶句　一冊
漫遊文草　五冊
左傳凡例考　一冊
歳華一枝拾遺　一冊
略註五經字引　一冊
書家必用　一冊
増補文語碎金　二冊
宋名家詩選　二冊
香籤集　一冊
蜀山先生詩集　一冊
昔々春秋　一冊
左傳比事　一冊
名乗字引　一冊
篆書字引　一冊
書家錦嚢　一冊
八面鋒　四冊
晩唐百家絶句　五冊
和歌題百絶　一冊
東征稿　西上記　二冊
酒中趣　二冊
歳華一枝　一冊
名乗字彙　一冊
易學小筌　一冊
書家便覧　一冊

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』　請求記号 特1-5
ガラス使用

古韻通叶　一折
治痘要方補遺　一冊
疱瘡食物考　一折
種痘辨義　一冊
日養食鑑　一冊
世事百談　四冊
子昂真草千字文
蘭竹画譜　二冊

醫書之部
治痘論　一冊
痘疹戒草　三冊
治痘要訣　一冊
保嬰須知　二冊
雜書之部
翁問荅　四冊
尾礫雜考　二冊
子昂龍興寺碑
竹沙小品　一帖

治痘要論　一冊
痘疹養生訣　一冊
續痘科辨要　三冊
方函　二冊
三省録　五冊
東江小倉百首　一冊
隷書醉翁亭記
光琳百圖　二冊

光琳百圖 後編　二冊
蕙齋略画　二冊
裝劔備考　一冊
貞丈家訓　一冊
校正孔方圖鑑　一冊
佛鬼軍 一休　一冊
善惡種蒔和讃
歌書之部
貫之集類題　二冊
千町拔穂　一冊

画圖撰要　三冊
刀劔圖考　一冊
鞍鐙圖式　一冊
田畑調法記　二冊
珍錢奇品圖録　一冊
三界一心記　一冊
八部秘講釋　一冊
園圃拔菜　二冊

一蝶画譜　三冊
刀釵圖考二篇　一冊
甲冑著用辨　二冊
百姓袋　一冊
古錢鑑　一冊
日蓮御一代記　一冊
暦日講釋　一冊
萬葉用字格　一冊

香川景樹集 桂の落葉　二冊
海野遊翁詠 柳園家集　二冊

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』　請求記号 特1-5
ガラス使用

霊能一貫　二冊
蜀山百首　一冊
俳諧之部
續故人五百題　二冊
新〻五百題　二冊
近世五百題　二冊
過日庵撰 近世十家類題　二冊
十萬發句集　四冊
發句古今撰　二冊
俳諧寂栞　二冊

源氏物語系圖一折
仮名類纂　一冊
掌中故人五百題　一冊
嘉永五百題　二冊
白雄坊五百題　二冊
名所千題集　三冊
乙二發句集　二冊
過日庵輯 蒼虬翁句集　二冊
饒舌録　二冊

手柄岡持狂歌狂文 あおそらゝ　二冊
竹村茂枝集 穂向屋集　三冊
新五百題　二冊
今人五百題 二篇　四冊
過日庵撰 今人百家類題　二冊
題林發句集　四冊
曉臺七部集　二冊
今人發句集　二冊
過日庵撰 名家類題　四冊

一葉集 芭蕉翁一代集　五冊
俳諧四季草　四冊
風俗文選拾遺　二冊
梅澤先生手本向
千字文　一冊
御成敗式目　一冊
新三十六歌仙　一帖
續撰朗詠集　二冊
諸流手本向
同真名序　一帖

一葉集 後篇 翁之文消息　四冊
安政五百題　二冊
過日庵撰 類題金玉集　四冊
庭訓往来　一冊
消息詞　一冊
女今川　一冊
雪後帖 石摺　一帖
實語教童子教　一冊
尊朝瀟湘景　一冊

俳諧集草　十六冊
風月往来　一冊
庭梅帖　一冊
女雅俗要文　一冊
新撰詩歌合　一冊
大槁庭訓往来　一冊

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5
ガラス使用

大槁新年帖　一冊
蓮池堂法帖　一帖
雜書并繪入物之部
十返舍一九案文
諸國書狀指　一冊
繪本國恩俚談　一冊
米錢胸算用　一冊
十返舍一九作
附會案文　一冊
唐土名所の繪　一枚
花鶴百人一首　一冊
橘正敬庭訓　一冊
瀧本芳野道の記　一冊
教訓圖會前後　二冊
大學笑句　一冊
毋朝神拜小言　一折
山東京傳作
滑稽文選　一冊
甲越勇士鑑前後　二冊
正敬商賣往來　一冊
瀧本鴻書帖　一冊
皇朝三字經　一冊
裁縫早手引　一冊
式亭三馬作
小野馬鹿村　一冊
安見道中記　一冊
諸職雜形　一冊
女大學玉文庫　一冊
女庭訓往來　一冊

天下一方　登龍丸　合物一切

壹粒入一包代百文
七粒入一巡代六百五十文

泄瀉霍亂丸は天下一方我家の秘法にして疫病流行の時分一家の物業を捨て

十年二十年疫病流行の時分家内下男迄病欲にかゝり業を捨て

あるいは泄瀉霍亂丸は泄業一粒寢る時分に用ゆる時は疫病を

免れ難き流行の時分に胃を調へ元氣を

增し延命長寿�About 古今家代不絶

一十年廿年の暑熱　一労症の　一風のせ丸

一からせ丸　一疫病はてゝ出ず　一間煩ぜうつ丸

一面腫ゆくもゝ痛　一婦人産前産後妊娠のせ丸

抑疫病の業者ゆう法の出物なれば業なれば有るべきなり

特1
5

083.3.7
農家必讀
カーテン

農家必讀二編三編四編

各三冊ツヽ

追々近刻仕候

山崎久作編輯

安政六年
未秋刻成

東都書林　下谷佐成道
青雲堂英文蔵

東京大学

東叡山
御用　御書物所　江戸下谷御成道
青雲堂英文蔵製

永楽二条西ノ堀町	出雲ヶ文次郎	上総佐浦	陰田美義	奥州白石	大木次兵衛
大坂八軒橋ノ北ノ町	伊勢屋義吉	下総屋吉	古屋久次郎	出羽山形十日町	大坂屋次郎
伊勢松坂市場	尾張屋吉義	常陸古河	橋本七	信濃屋善蔵	岩屋八百吉
加賀金沢一番町ノ筋	天満屋武兵衛	上野高崎	伊勢屋要義	同横山荒町	和泉屋長吉
甲州谷村	尾張屋長助	同下紀田	桜井源蔵	同松本	岩松屋徳十郎
安芸宮島小倉	中伊屋弁助	下野佐野天明	越後屋三郎	同若松	小林屋徳吉郎
長門萩城下町	山城屋源十郎	同板木外町	升屋徳吉	同上田市入	住屋金之郎
紀州和歌山内大工町	玉屋要義	尾張名古屋	伊勢屋徳吉	越後高田	角屋七右衛門
同熊野の文書	角屋若義	奥州仙台五番町	伊勢屋市吉	同水戸	紅屋八右衛門
遠州中泉	海屋勘助	同今津ノ松本の町	森岸八郎平	江戸本石町十軒店	英大助

国立国会図書館　タイトル『農暇必読 3巻』 請求記号 特1-5

ガラス使用